北支

現地編輯

THE NORTH CHINA

8[2]



昭和十四年[illegible]第三種[illegible]昭和十[illegible]月十[illegible]印刷[illegible]本 昭和十五年八月十日發行(毎月[illegible]日發行)第[illegible]



A PASTORAL SCENE: Horses Grazing Leisurely

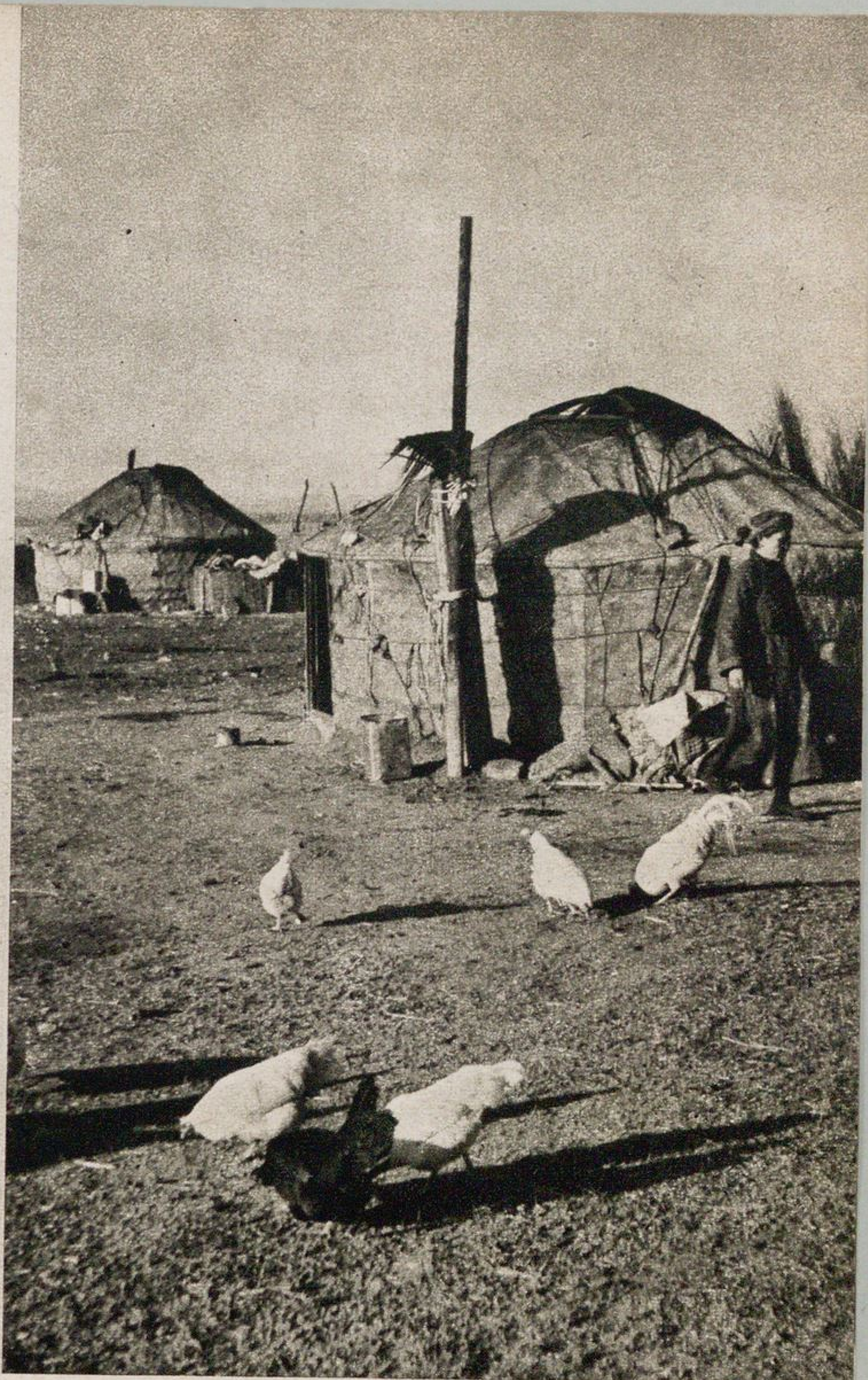
蒙疆

放牧



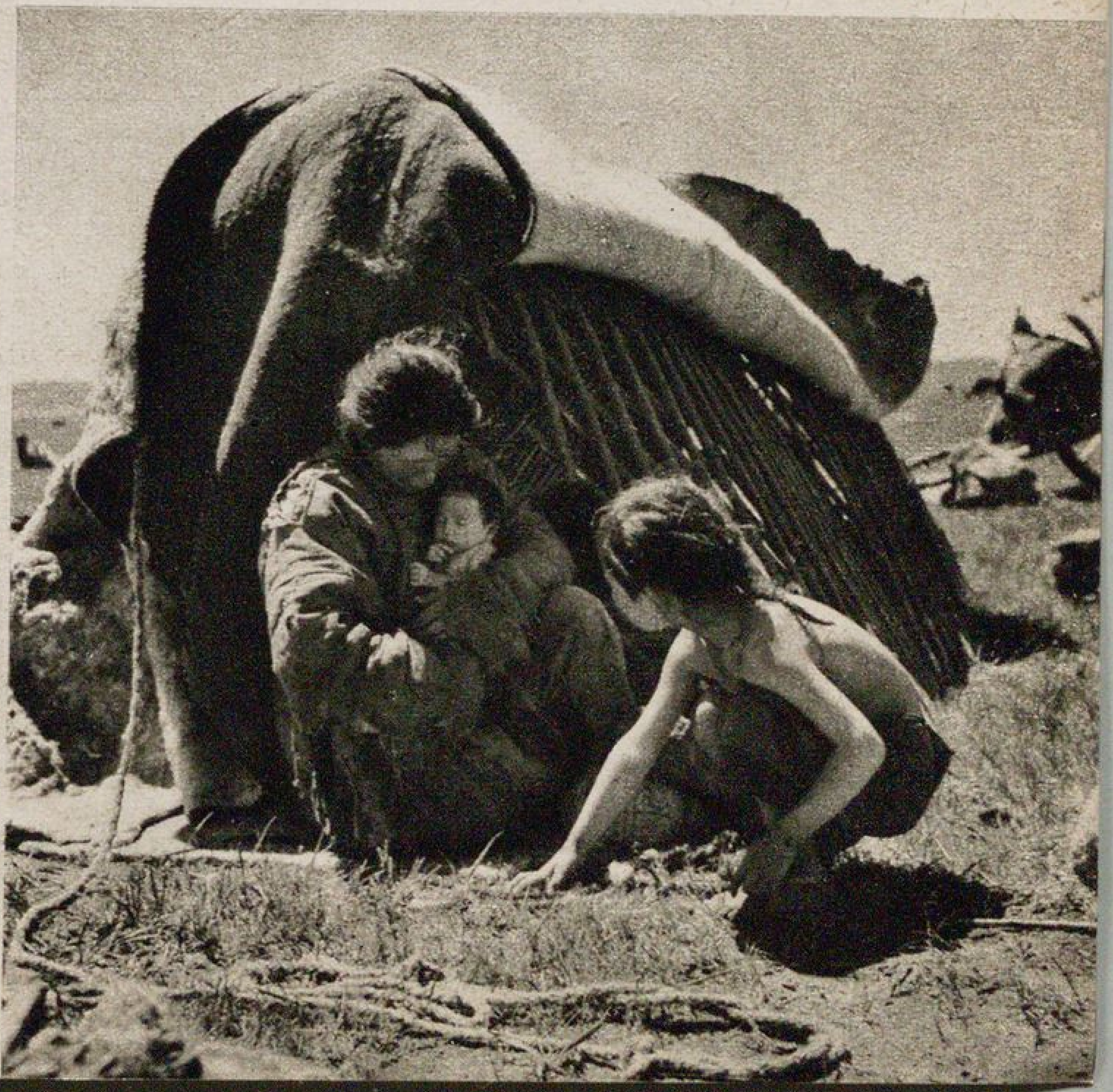
牧民

蒙古人の生活を見てゐると人類がまだ讀みもせず書きもせず默々として家畜と共に生活してゐた原始時代の有様が想像されるのである
どこまで行つても涯のない蒙古の大平原を牛、馬、羊など幾百千といふ家畜の群を逐ひながら移動して行く――一本の木もなく畑もない、たゞあるものは大地と空との連續のみである――さうして水や草があればそこに包を組み立てて部落を作る
遊牧民の生活は人間ばかりの生活ではなくて、人間と家畜との共同生活でぁる。又ときには家畜を主とした人間がそれに從つて右往左往する生活である
夏は水邊に、冬は高地に草のいゝ土地を探して部落を根こそぎ持つていくのである。家を求めて引越すのではなく包を解いて牛車で運びいゝ場所を見つけては、そこに組立てるのである
彼等のたのしみは家畜が大きくなることと夏のオボ祭、秋のラマ廟會である
特に夏のオボ祭には老若男女とつておきの晴着をまとひ、珠玉を飾つて草原の彼方此方からオボをめがけて集まつてくる。牧草繁茂した丘のあちらこちらに高山植物のやうなかぼそい白い花が咲き、紫のネヂアヤメ、モウコマツムシ草などが色鮮かに草原を彩る
蒙疆に住む遊牧民の家畜飼育頭數は馬三十九萬頭、牛五十七萬頭、羊五百萬頭といはれてゐる。特に日本に於て年三億ポンドも消費され、その殆ど全部を外國に仰がねばならない羊毛がこゝで四千萬ポンドとれる。羊毛の生産地として將來を期待されるわけである



牧夫の包 ↑

移動に簡便な包 ↓







槐

古都北京は又森の都です。春先から晩秋まで街を埋むる綠の變化はいみじくも旅人の旅愁を慰め、北京人の日常坐臥にニュアンスを與へる。この樹海の大部分の要素は槐と楡と柳とアカシヤです。北京はアカシヤが二度咲くよ、とびつくりした新來者がありましたが實は槐とアカシヤをごつちやにしてゐるのです。それ程よく似てをるけれども、大分違ひます。第一に花時が槐は

二月餘後れる。葉の形がアカシヤは先が圓味を持ち、槐は尖り氣味である。槐はアカシヤ程上に伸びず、横に枝を伸します。それから槐は枝にトゲがありません。花もよくアカシヤと似てゐますが、アカシヤ程派手でなく、匂もかすかにつつましく、葉の繁みにまじつて咲く、いかにも北京の街路樹にふさはしい樹であります



The HUAI Tree So Often Found Near the Buddhist Pagodas

屋根の怪物

Some Gargoyles on Chinese Roofs



大同石佛寺の屋根

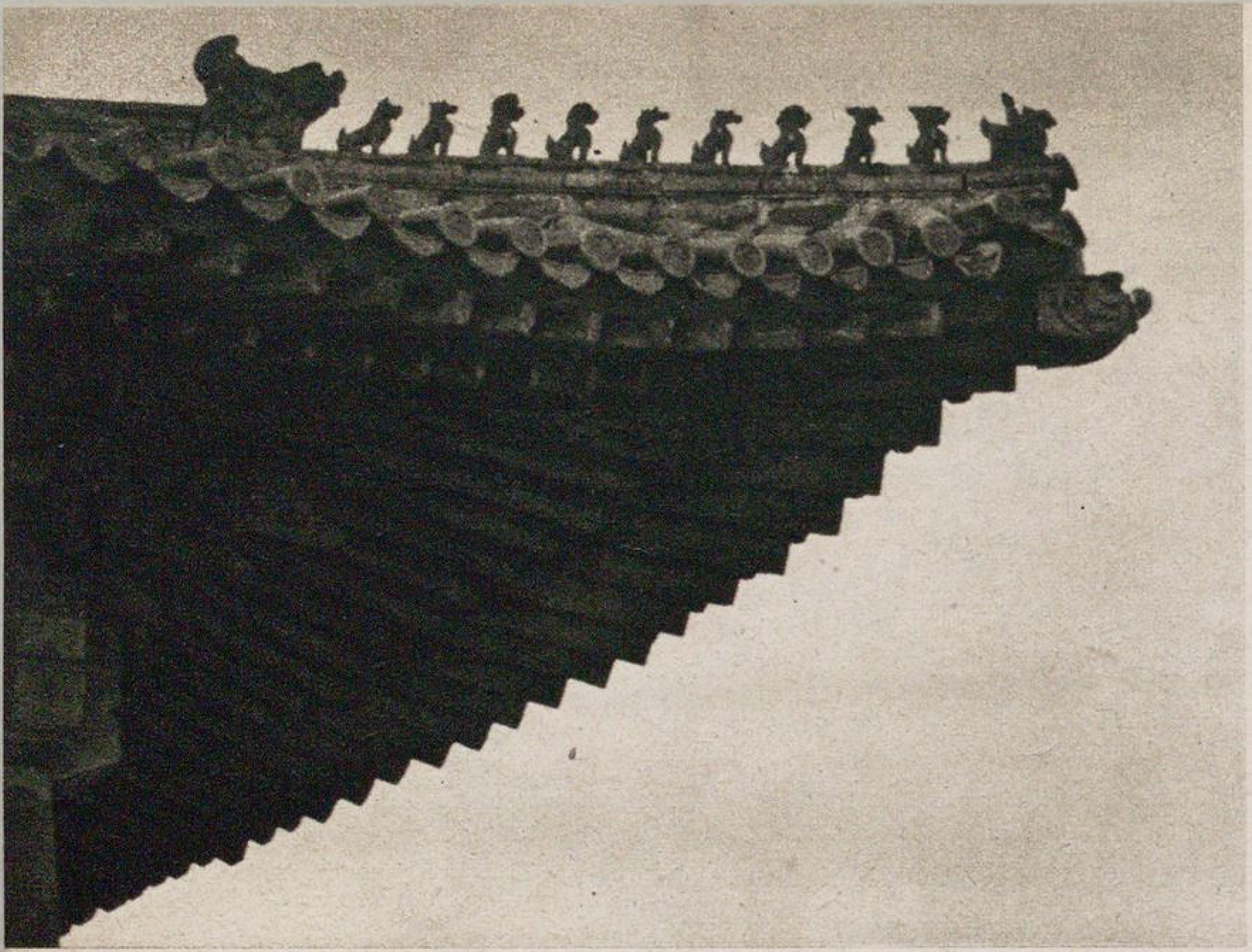
支那の建築物には屋根の大棟の両側や屋根の四隅に奇妙な獸類や魚類の頭がつけてある

大棟の両側につけてあるのは正吻又は鴟尾といふ。日本の鯱魚のやうなもので何か飾らうとするのは人間の自然の感情らしい。後漢時代はたゞ單に三角形の出つぱりにすぎなかつたが魏晉南北朝時代になると左頁右下の寫眞の様に何ともエタイの知れない物になつたこれが唐代末期になると大棟の端をのみこむやうな大きな口を開いた頭の彫刻がつき尾が魚のやうになつたのがあらはれてきた。この尾ももう一段すゝむと大同等に多い蛇のからんだやうなものになつてきた

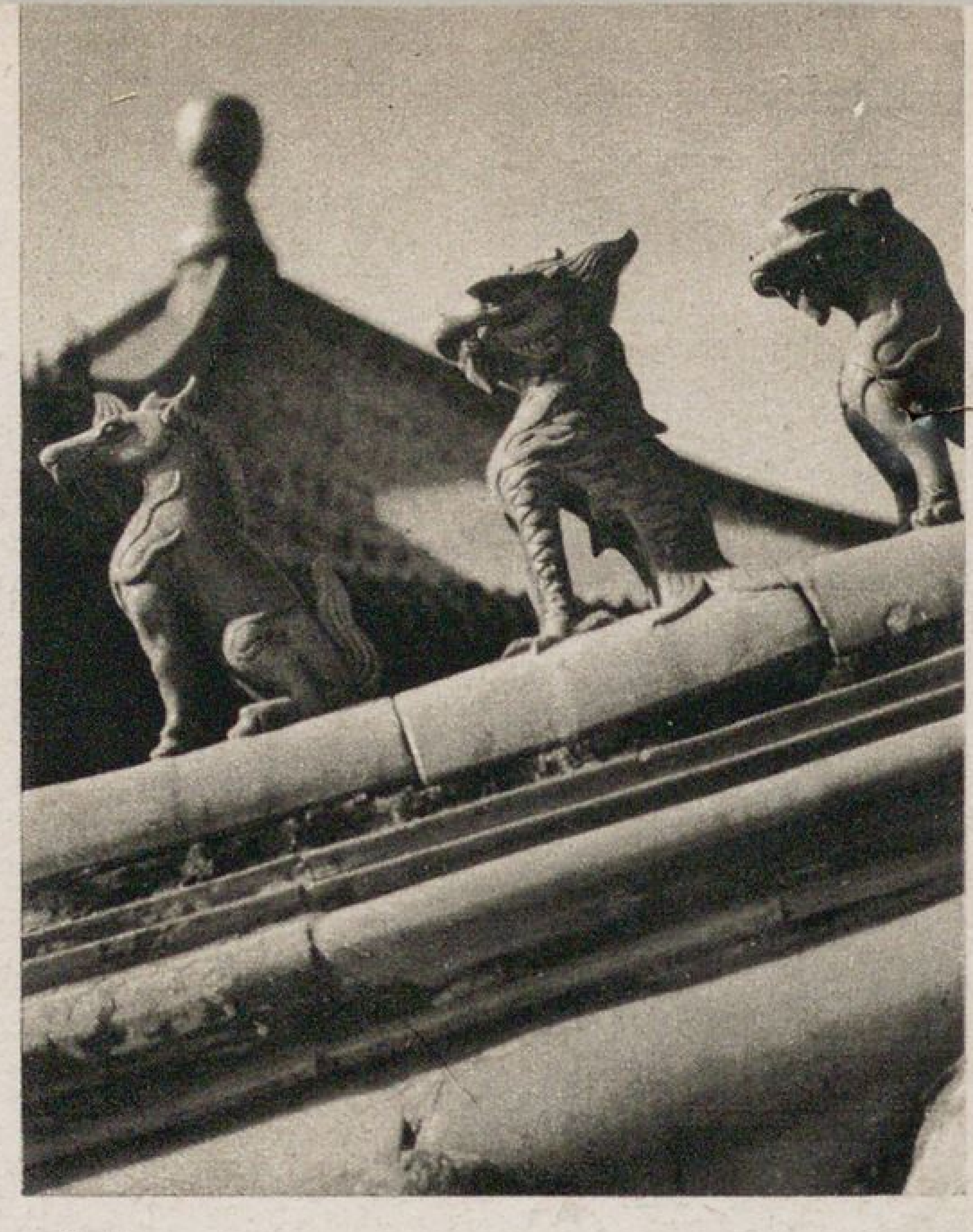
日本では鴟尾がすたれて鬼瓦が用ひられるやうになつたが支那には日本式の鬼瓦は見られない

屋根の四隅についてゐる小さな彫刻瓦の怪獸を垂獸といふ。これは並ぶ順序がきまつてゐて一番先頭は鳥にのつた仙人、その次からは獸や鳥がひざまづいてゐる姿になつてゐる。小建築には三つか四つ位しかついてゐないが紫禁城などには九つも十もならんでゐる。鴟尾や垂獸を屋根につけるのは火事などの災害をよける魔よけを意味してゐるといはれる

詳しくは「北支」五月號の記事頁村田治郎博士の「屋上の怪物など」を參照されたい



紫禁城の垂獸



左の接寫



紫禁城の正吻 ↑

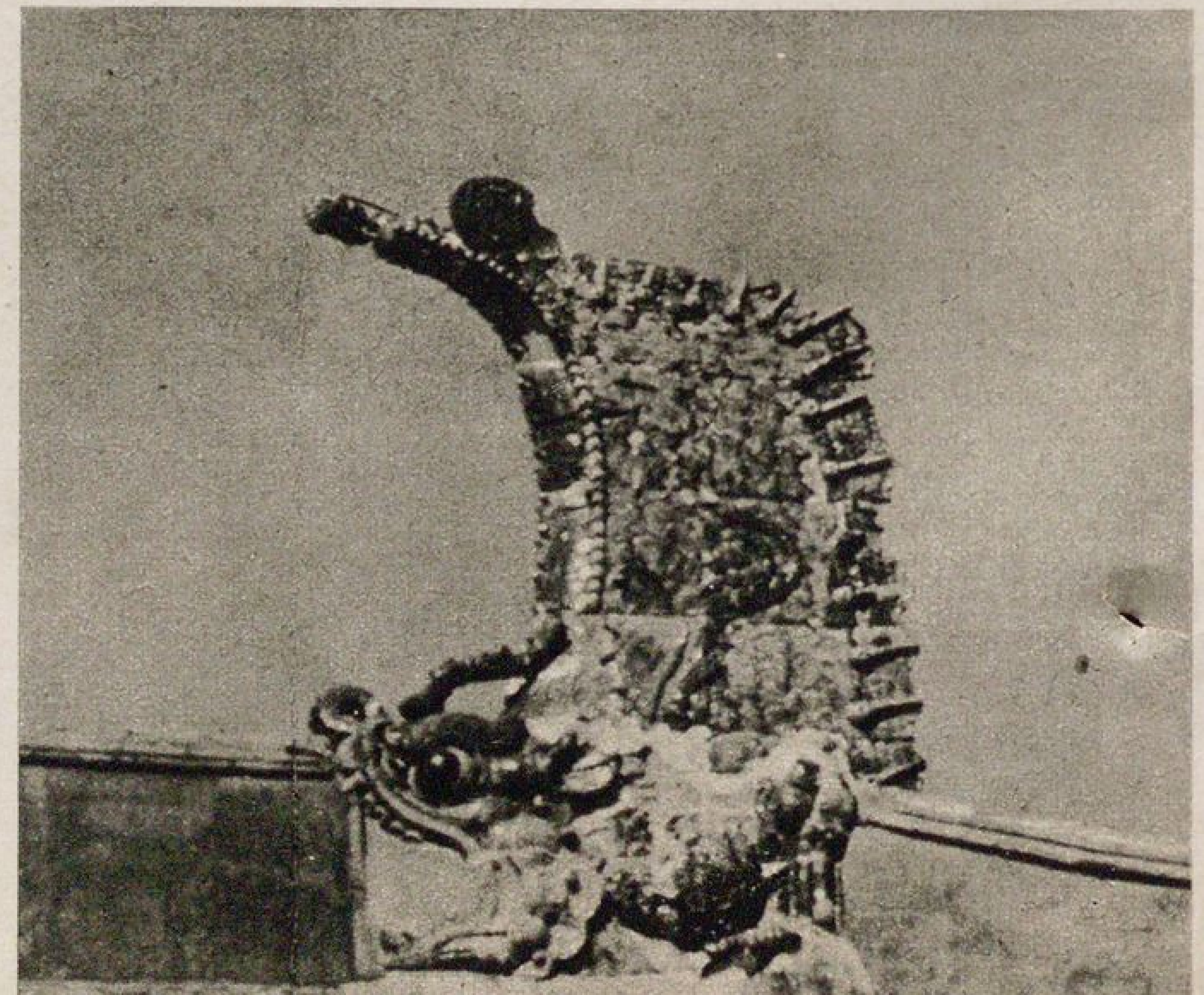


大同の龍頭 ↑

明清時代の正吻 ↓



遼金時代の鴟尾 ↓





魚を釣る子供たち・北京郊外

水二題

WATER SCENES

流れに葱を洗ふ農夫・北京郊外



街の日滿華親善標語の下で





果物うり

芝罘

「大陸は殺風景……」でせうか。シーズンになると、香りの高い新鮮なくだいゝものがたくさん出て、私たちをたのしませてくれます。河北・山東の二省は昔から聞えたくだものの產地で、年產約六億斤、出盛りには道ばたの露店にも港の舢舨(サンパン)にも季節のくだものが美しくならべられます

芝罘の水蜜桃、昌黎の梨、南口の柿、宣化の葡萄など有名で、その土地々々の匂ひと味をたゝへてゐます

目下、關係方面で增產計畫が樹てられ北支を將來「東洋のカリフオルニヤ」にしようといふ意氣込みですが近ごろ嬉しい話題です



港の舢舨（舟）の上で

ruit Vendors in the Streets of Chefoo



纖手、交通戰士を守る

華北交通鐵路醫院・華人看護婦



右、日本語の講習をうける

左、仕事にいそしむ

Well_Trained Chinese Nurses at the N. C. R. Railway Hospital



North China Railway Company's heroes in the Railway Hospital

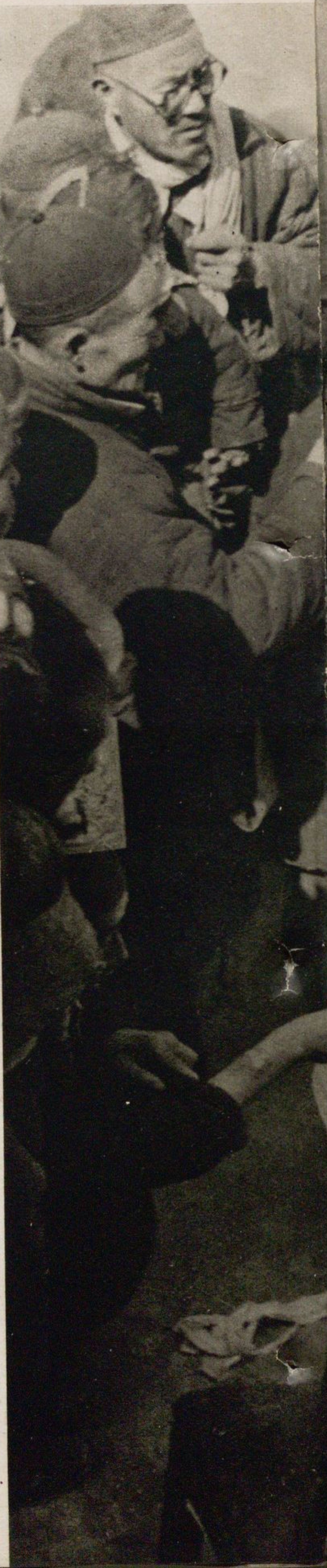
白衣の交通戰士

華北交通・鐵路醫院

衣食住とも不自由な日常であり、而かも絶えず生命の危險にさらされつゝ大陸鐵道の第一線に健鬪する日支十萬の社員の爲に、華北交通會社では管下鐵道沿線四十箇所に診療所を置いて、此等平服の戰士の健康相談に、醫療に萬全を期してゐる。中でも北京・天津・張家口・太原・濟南・青島・石門（舊石家莊）の七醫院は全科綜合病院として近く完成することになつてゐる醫療施設のない驛の勤務社員に對しては一週一度巡回してくる診療班によつて醫療を受けられるやうになつてゐるこれと同時に華北交通では社員のみならず沿線の一般住民に對しても宣撫工作の一端として巡回施療班を廻して、近代醫術の恩惠に浴せしめてゐるが、文化に遠い民衆にとつては何よりの惠澤であつて間接に我國策に寄與する所が少くない。また同社には保健科學研究所があつて、豫防醫學の立場から各種の風土病を研究し豫防劑を創製するなど、未開拓のこの方面に大いに力を入れることになつてゐる

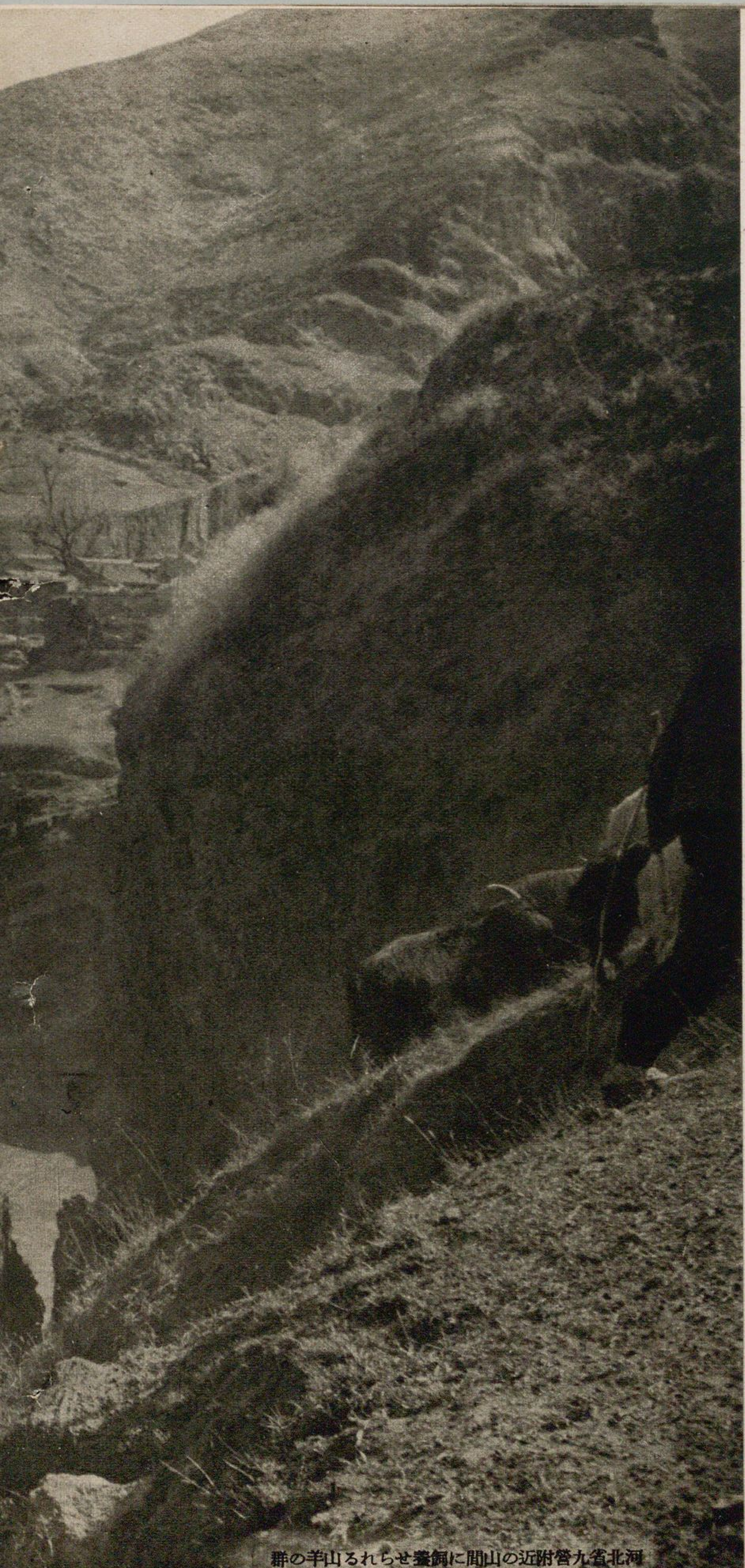


赤外線治療をうける華北交通社員の家族・北京



野天にて愛護村民を施療する、同蒲線

山羊



河北省九營附近の山間に飼養せられる山羊の群

A Lens-Eye View of Goats





甕城
—臨汾—

支那の都市は概ね城壁で圍まれてゐる城壁にはいふまでもなく城門が設けられてゐる。北京の内城は九門を開くこの城門の一種に甕城といふのがあるこれは城壁に設けられた本門の外に、更に半圓形の疊壁を張り出しそれにまた門をつくつたものであつて、その形が甕に似てゐるので甕城と呼ばれたのである。疊壁は必ずしも一つでなく、時として二重にも三重にもなり、しかも夫々の疊壁の門は互に食ひちがふやうに設けられてゐる。これは敵の侵入を防ぐのに便利なやうにしたもので、唐の初めころ北狄防禦のため北邊につくられたのがその始めらしく、それが一般の都市にまで設けられるやうになつたのは宋代以後と記されてゐる

臨汾は古の平陽であり、堯が都を定めたところである。城は唐時代の創建といはれ、その後幾度か修築されて今日に及び、たゞ東關だけがわづかに昔の面影を存してゐる

城は東に臥虎山、西に汾河を隔てて姑射山脈の連峯を望んだ汾水平野の一角に位置する。周圍十一支里、高さ四丈五尺、外側は磚、内側は土の城壁をめぐらし、東に武定、西に和義、南に明徳、北に鎭朔の四門を開いてゐる



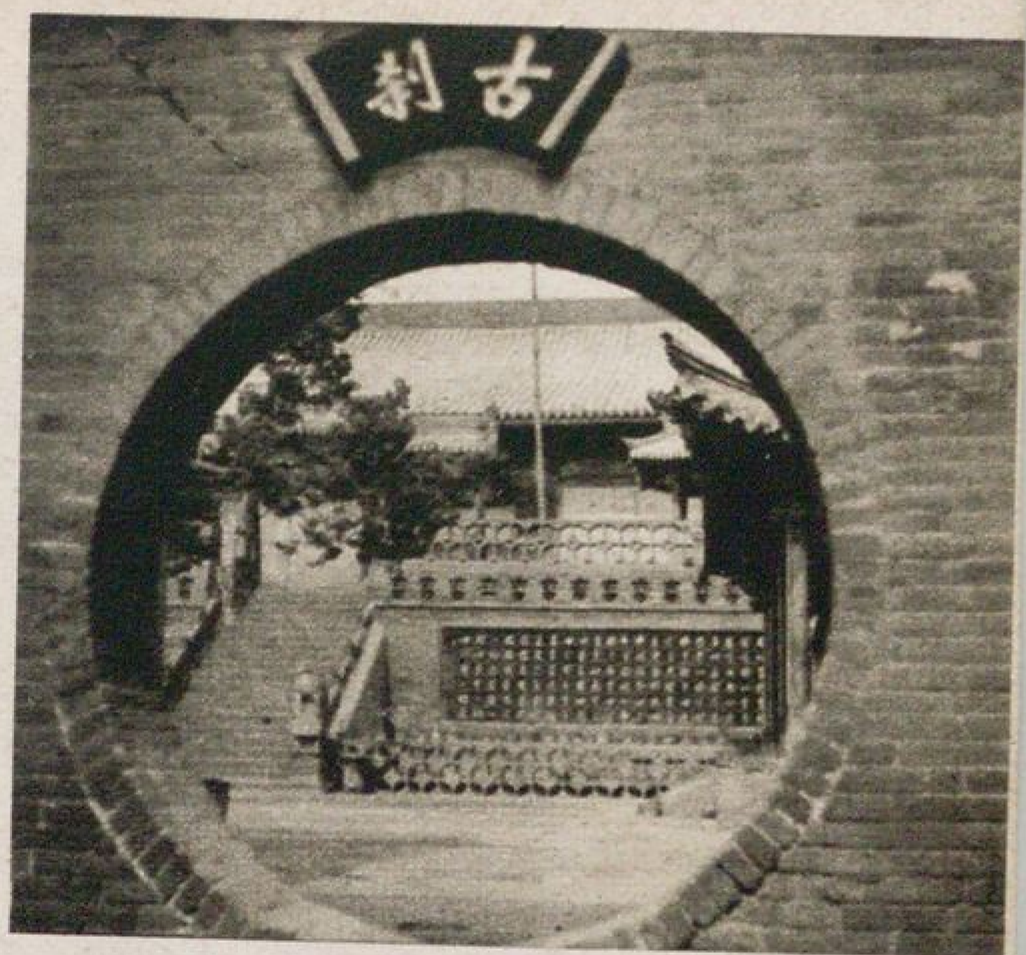
The Yung-Cheng Castle in Linfen on the Tatung-Fenglingtukou Line



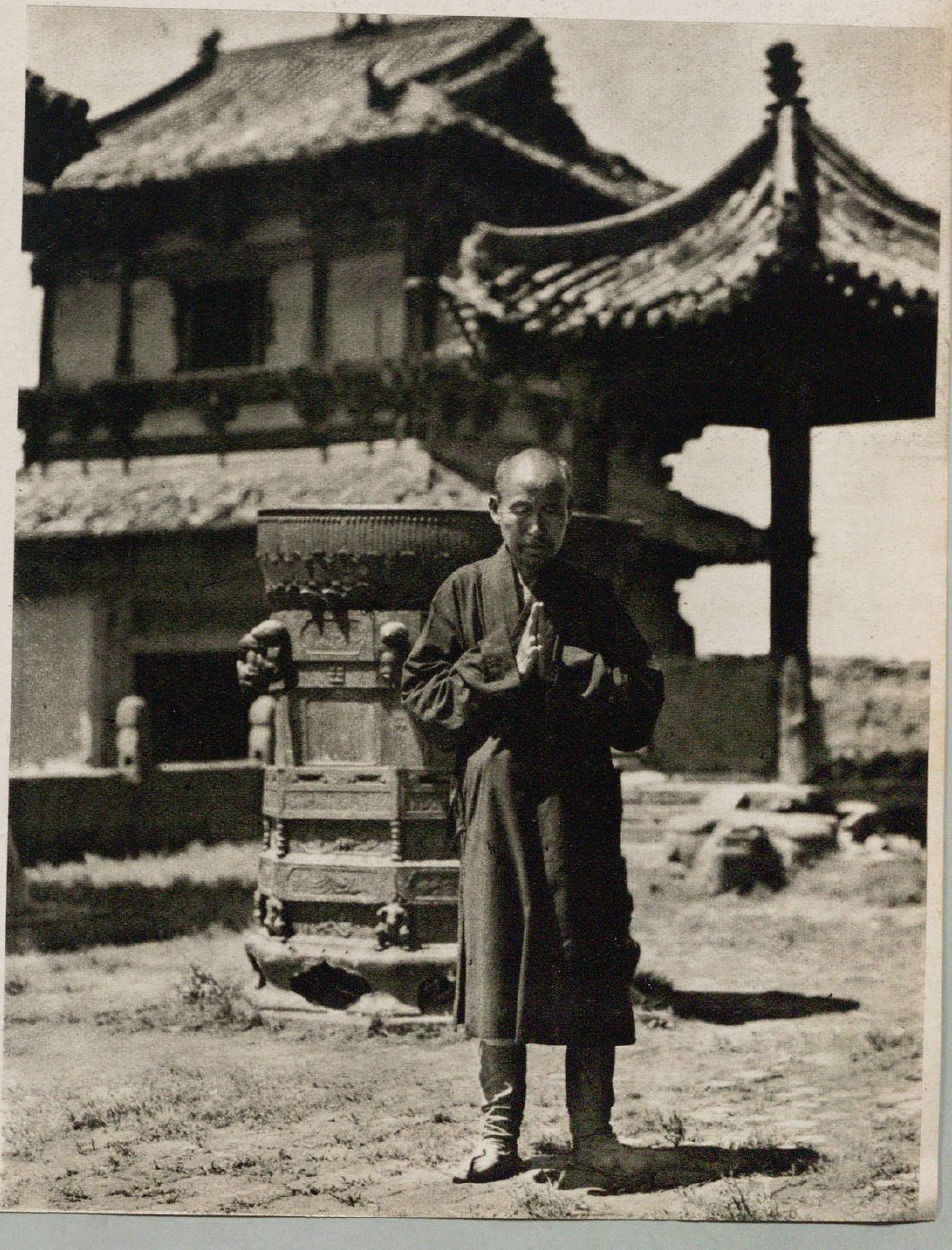
下華嚴寺薄伽教
好長き耳着衣の

大同の古刹

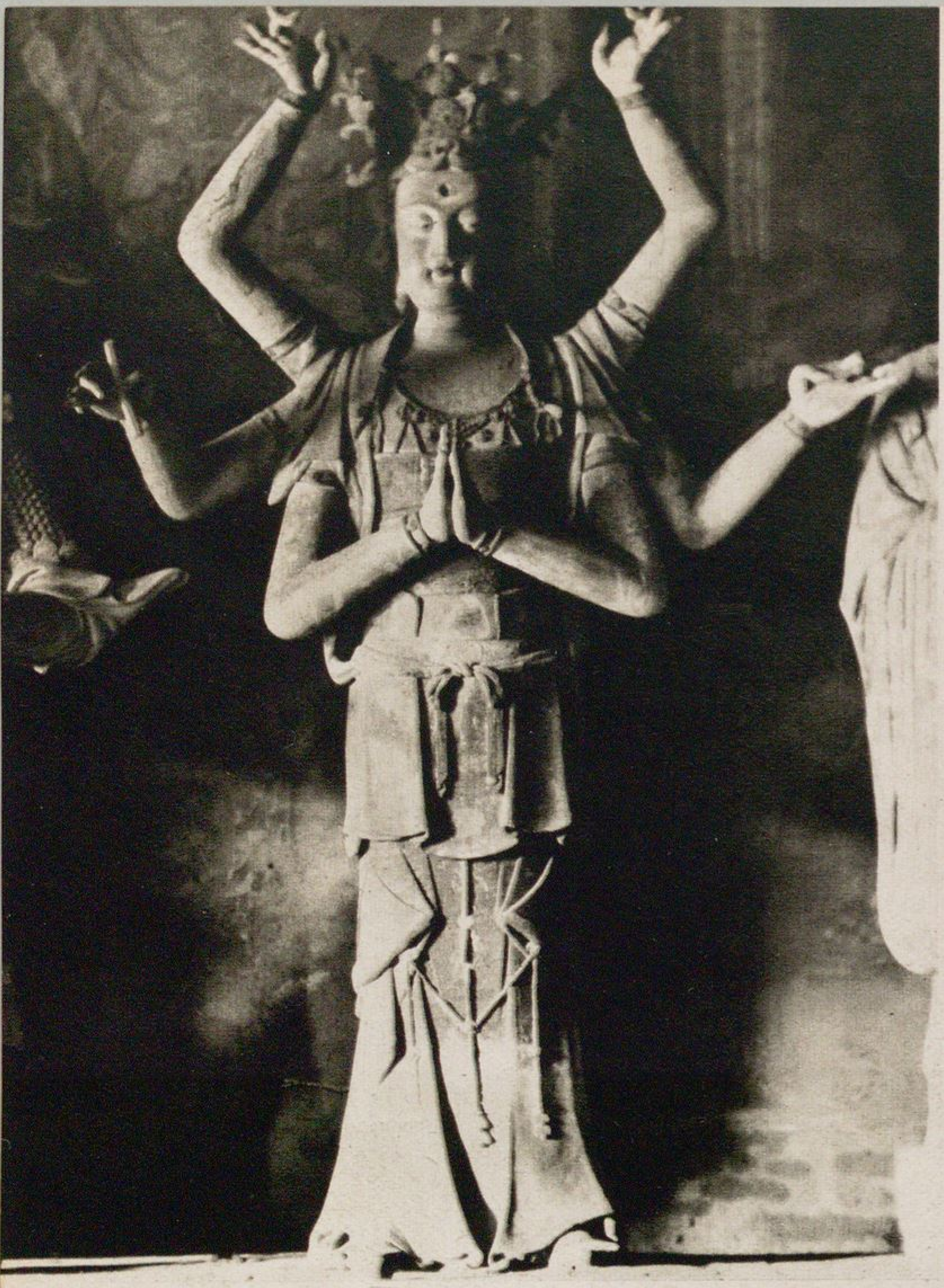
Some old Buddhist Temples in Tatung on the Peking-Paotao Line



上華嚴寺の大雄寶殿。建築は金代のものである。寺院が東向きの結構を持つて居る點で注意される。



善化寺の老僧。背後の普賢閣は遼代の建築と云ふ説がある。今は隨分ひどい荒廢振りだ



善化寺大雄寶殿内護法天。本尊の兩脇の二十體宛の諸天の一つである。
處々修理の跡が見えるがよく均勢のとれた佳作だ。金代の塑であらう。



殿内の釋迦如來像。遼代の作である。豐な相
或は光背などに猶唐代の面影が殘つて居る

大同は北方民族が北支那に勢力を振つた時代には何時も榮えた。北魏には平城と呼ばれた約九十年間の帝都で、遼金には陪都西京として前後二百年餘も殷盛を極めた。その頃佛教の興隆がこれに伴つた。北魏時代の此地の佛教の隆盛は史書に見えてゐるが雲崗石窟を除いては——勿論此の大遺跡だけで充分なのだが——今日全く殘つて居ない然るに遼金時代の佛寺は幸にも今日城内に存して居る。即ち上・下華嚴寺と善化寺とがそれである。上・下華嚴寺は略して上寺下寺と呼び、城內の西南隅に在る。今は分れて二寺となつて居るが、これは明初からのことで、元來は一寺であつた。

約九百年以前、即ち遼の清寧八年に建立され、當時道宗は寺內に諸帝后の銅像や石像を奉安したと云ふ。遼金興退の際、善化寺と同樣に兵燹を蒙つたがその後再興され爾來今日に及んだものである。善化寺は城內南門の西に在り俗に南寺とも呼ぶ。その創建は唐代といはれ、初め開元寺と稱したが、五代に大普恩寺と改め、今の名は明の正統以降のものである。遼金時代がやはり最も寺運隆盛であつた。此等の寺院は勿論往年の盛況はないがなほ當時の建築や佛像を傳へて居て、今日訪ふ者をして其の時代の文化を偲ばしめる

中元節



放河燈、北京北海

恰度暑さも下り坂になつた時分、北海や中南海の蓮の花が咲過ぎた頃お盆がやつて來る。と、それにさきがけて街のあちこちに蓮花燈（日本の盆提灯に當る、チリメン紙で蓮の花片様に作り組合せて色々の形にしたもの）を賣出す。さやさやと何か樂しい街の點景である

上元は一月十五日、下元は十月十五日お盆は即ち中元で、俗に鬼節（クオイチエ）とも謂つて孤獨の精靈を慰問するわけだ。民家一般にお墓掃除を行ひ燒紙（亡者への贈物をする意味のこと）をして祖先の冥福を祈る

寺廟では盂蘭盆の座を設け、燒法船（紙張子の船を作つて燒き讀經する）をするなどやはり北京にふさはしい行事だこの夜、月明かな三海（舊禁苑の北海中海、南海）をめぐる人波は放河燈（燈籠流し）を逐うて續く。その中を子供等が、蓮の葉や、紙製の蓮花に灯して唄ひ乍ら馳廻る

　蓮花燈
　蓮花燈
　　今日は灯して
　　明日棄てる

すべて旅人の眼を樂しますに充分な風趣であらう

The Middle Year Festival from Different Angles



七夕に因める芝居

天河配

天の河の東に織女が住んで雲錦天衣を織つてゐました。天帝は獨では淋しからうとお婿さんを探してやらうと考へました。さて誰を擇ぶか、南天門から綵の毬を投げて當つた者と云ふことで、やつてみますと、つひに河西の牛郎の手に落ちました。さて織女は牛郎にお嫁入して仲良くしたのはよいが、すつかり機織を怠けるやうになりましたので帝母は大變怒つて又河東に連歸り、もう年に一度きり七夕の晩だけしか會つてはならぬときめつけました。翌年の七夕が來ると待ちこがれた二人は河邊に出て來ましたが、河を隔ててゐてどうにもなりません。怨み泣きに泣き崩れてゐると鵲が飛んで來て橋を作つて二人を會はせてやりました。だから毎年七夕になると驟り泣の聲が聞えると云ふ支那の傳說があります

☆

その傳說を芝居に仕組んだのが天河配で七夕の前後、北京の支那劇場で上演します。これは夢のやうな燈彩戯の一つで、此頃ハイカラな仕組のでは西洋のレビュウみたいな眞似をします。夜の天上界で舞臺を暗轉して、美しい天女達が手に手に燈を持つて流れるやうに踊るのがとても美しいとされてゐます



鵲橋



牛郎



A Dramatic Version of the Festival of the Weaver Star



街の中を茶瓶と駄菓子を擔いで・北京王府井

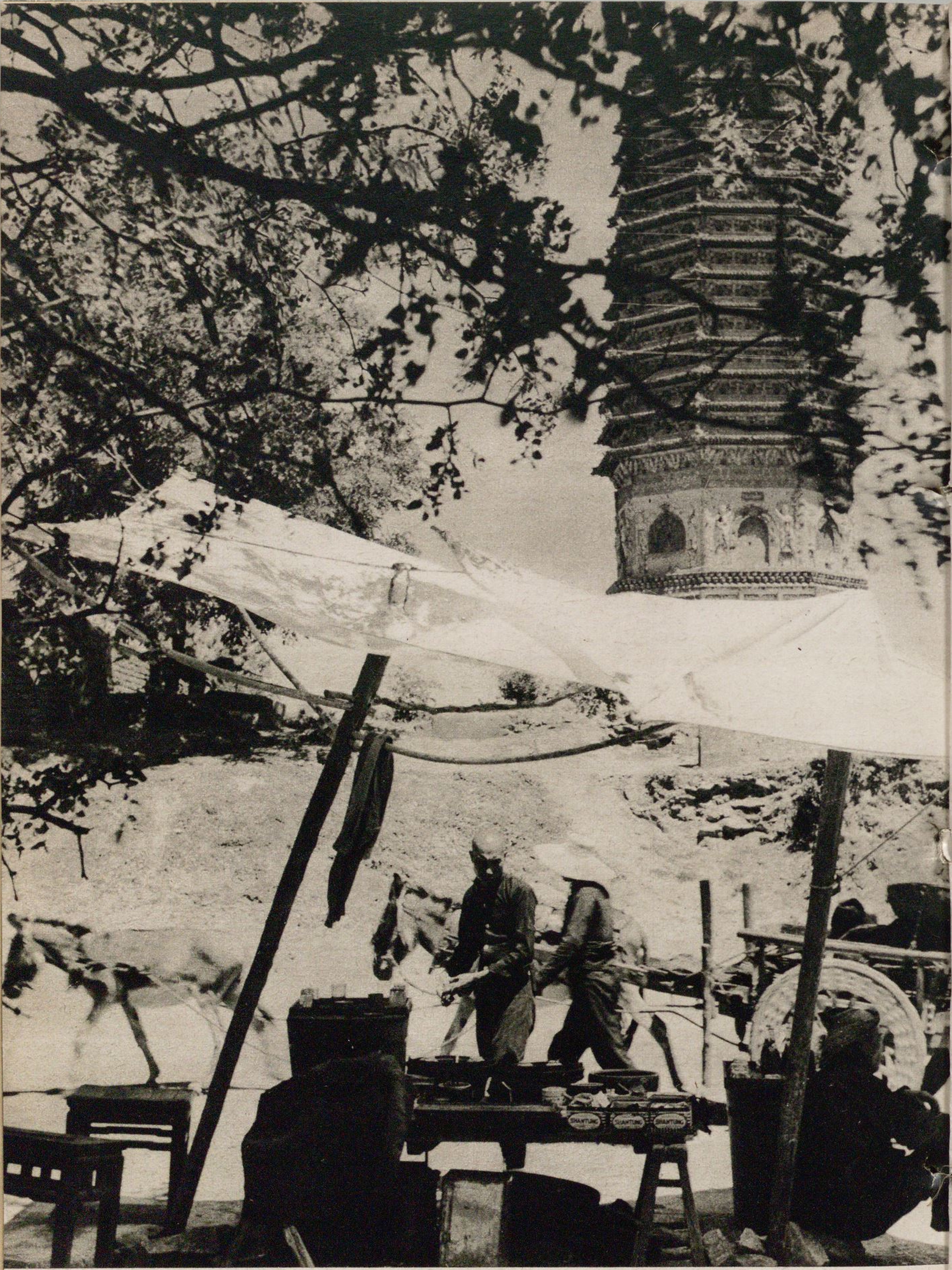
街のお茶うり

灼きつく炎熱にアスフアルトも溶けさうな眞晝時、ひよいと路傍の綠蔭にお茶賣りの涼しい額を見かけます。と、そこらで一馳りした洋車的が、汗を拭き拭き一杯くれ、と云つて、いかにも美味さうに啜るのです。一杯一錢、それに簡單なつまみの駄菓子か南京豆を用意してゐることもある。これはおほかたよぼよぼの年寄か小孩子の商賣になつてゐて殆ど資本要らずであるからどのみち小遣稼ぎに違ひない。しかし洋車的や街の苦力達にはなくてはならぬものです

由來中國人程お茶を嗜むものはあるまい、金持は金持、貧者は貧者なりに、夏冬の別なく飲む。それは乾燥した大陸の空氣がおのづから渇を招くのと、埃が多いので新陳代謝を盛にして汗に出してしまふ、等の理由が考へられるが、殆ど習慣的と云つてもよいでせう。三國志に劉玄德がお茶は貴重の品として入手に苦心した趣が見えるから、一般に普及したのは後代の事と思ふ



湯沸しの銅器・北京



城外の路傍の茶店・北京

Suppliers of Hot Tea on the Chinese Streets

木(ム)匠(チアン)

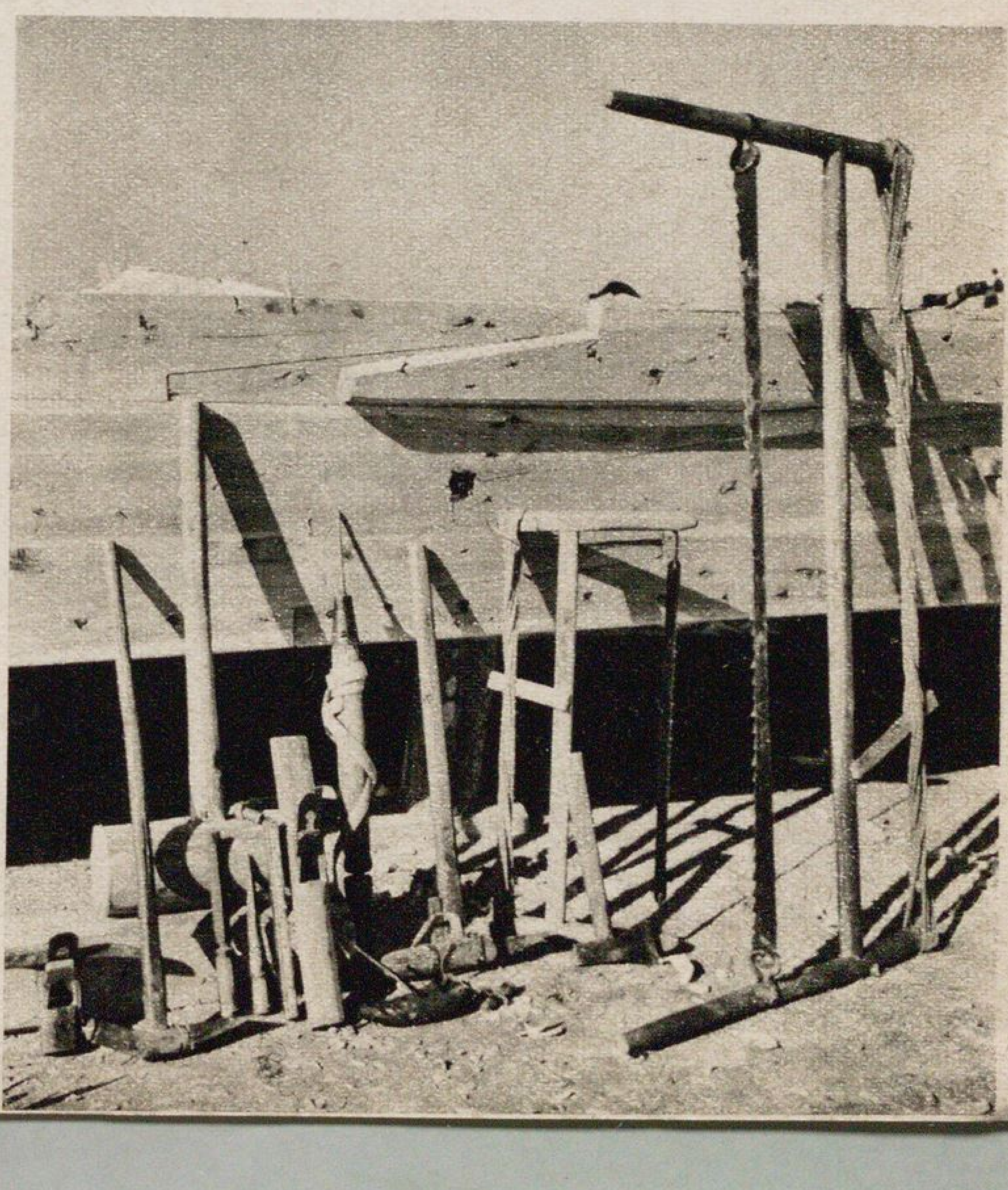
Chinese Carpenters at work

日本の田舍町を歩くと、どこかでギーギーと耳を抉るやうな製材所の騒音が聞える。あんな光景は支那、殊に北京ではまだ見當らず、まだまだ人の手で實に悠々とやつてゐると云ふことは支那の工業がどの位遲れてゐるかと云ふしるしてあるが、見た目にはそれが深い親しみを感じさせるのだ。支那の大工に洋式の家具など作らせると、とても下手をする。とても、昔からの古い家具に見る精巧さはみられない。これは永い間古い傳統の殼にはまつて來たからであらう。仕事道具も日本の大工と違つて、いかにも支那式に大ざつばなものが多い、それを平氣で使つてゐる。使ひ方で面白いのは鋸や鉋を押すのである。（二人用の大鋸はむろん上下にひくが）材木屋のことは木廠と云って

棹椅舖その他に別れる。生料木廠は專ら木材を生産地から購入れて、建築木廠その他に供給するのである。建築木廠は木材の賣買は決してやらない。北京は、いや北支一帶に木材は不足狀態で、殊に事變後は高價になつて來た。北京の消費木材は、從來おほかた天津・靑島を通して、外國や他省から輸入してゐたものである



黄河畔の船大工・包頭



船大工道具・包頭





街頭の木挽―上、北京・下、大同―



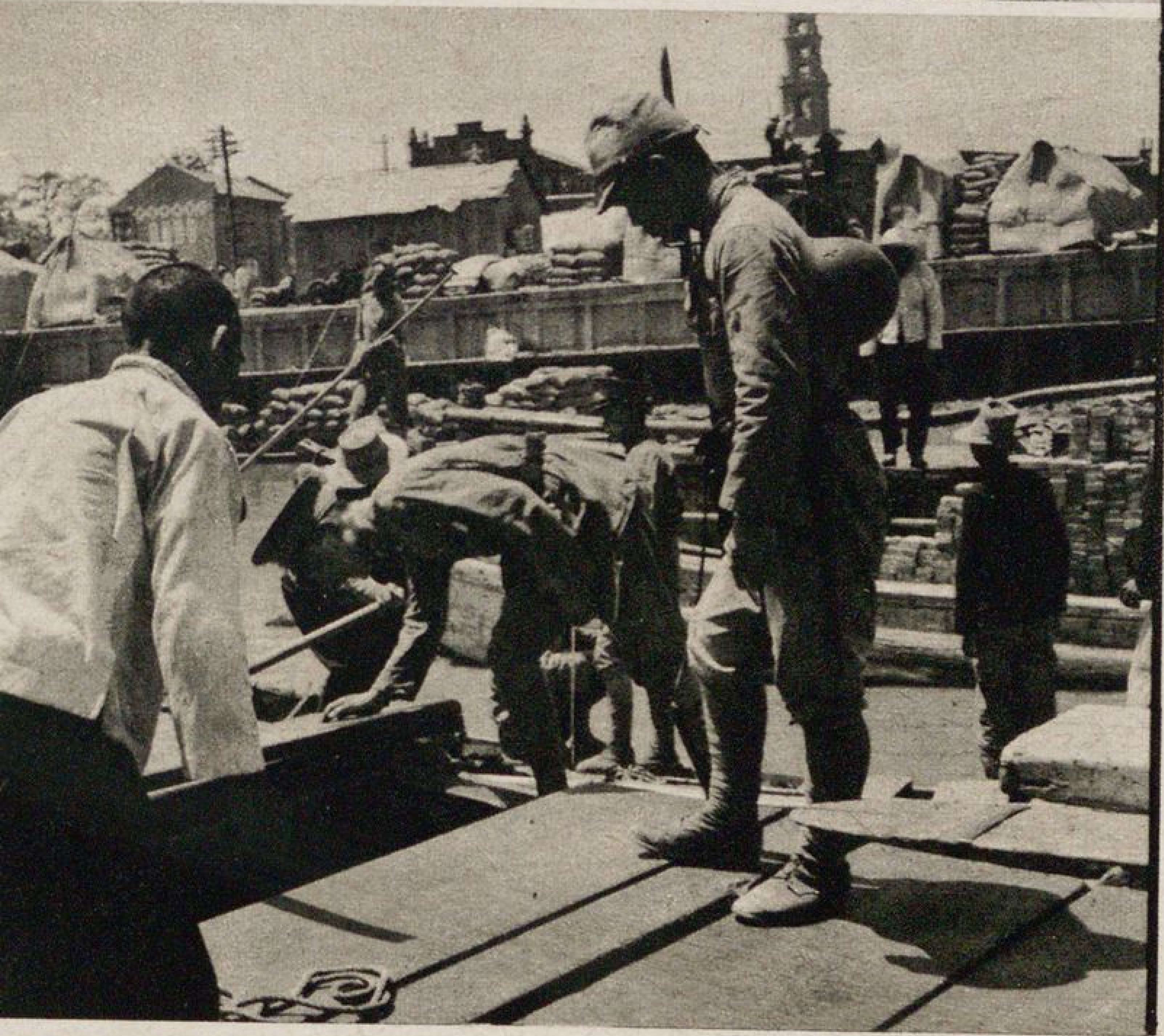
で、ガタピシした粗雑な仕事

をるが、生料木廠、建築木廠

大きな歴史 小さな歴史

News-Flashes from North China

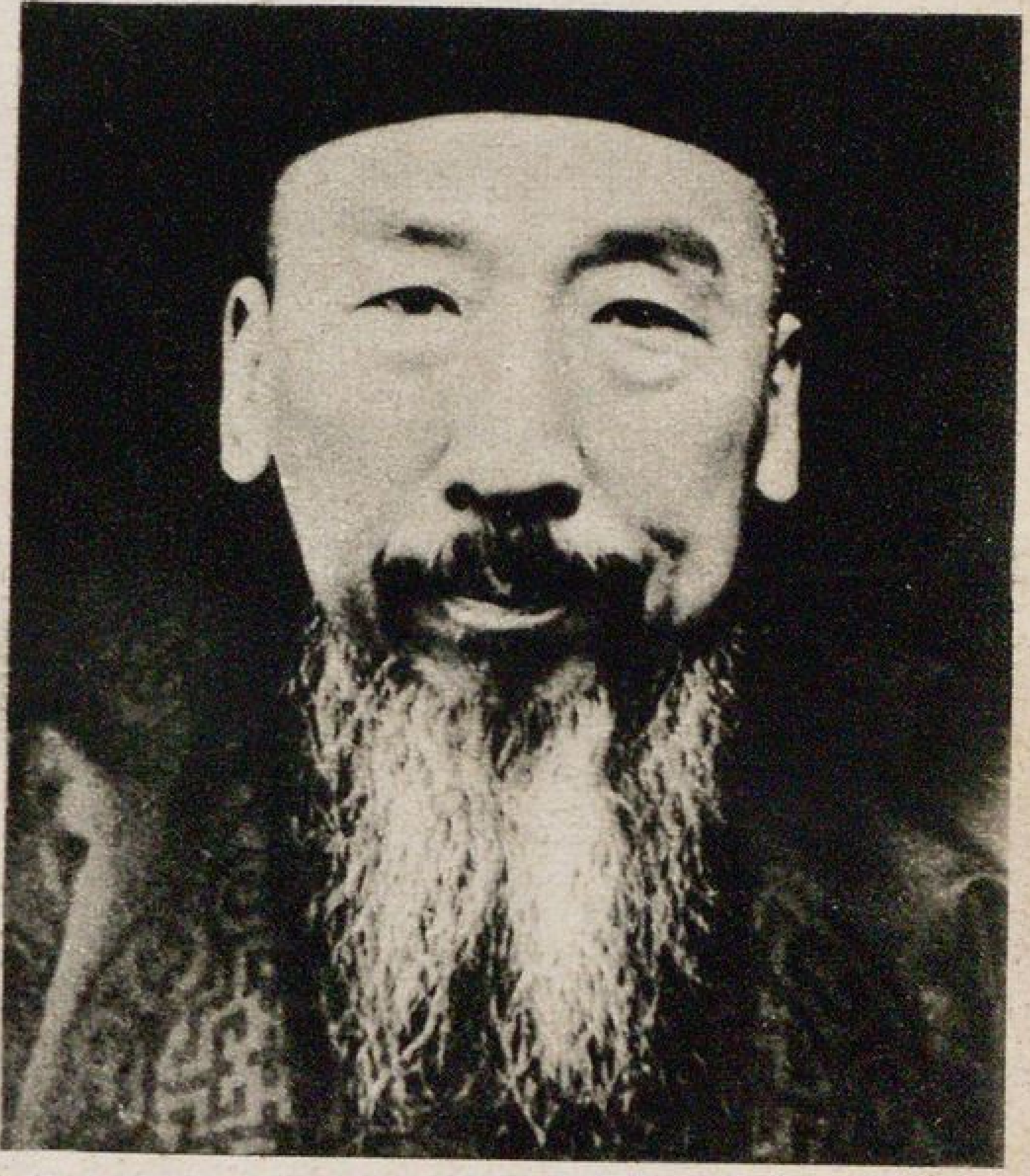




天津英佛租界隔絶解かる

昨年六月十四日英佛租界の敵性排除を目的として、斷乎たる決意に基き滿一年兩租界は隔絶され數次にわたる會談が續けられてゐたが、この程治安、通貨、現銀三問題とも英佛側に於てわが方の眞意を諒解、圓滿解決を見たので、六月二十日午後六時を期して隔絶は解除された

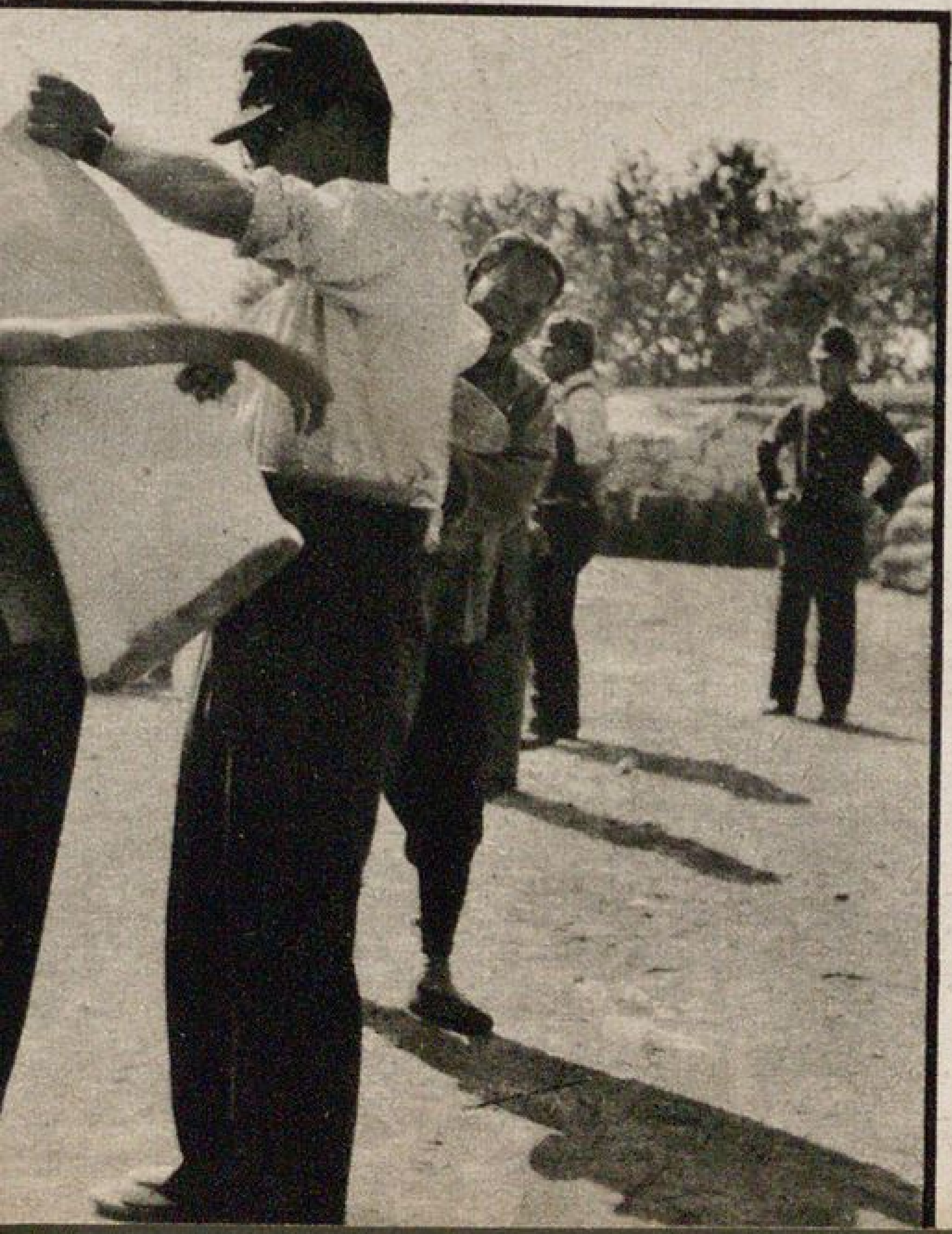
←



華北政務委員會委員長　王揖唐氏新

華北政務委員會委員長は去る六月王敏氏から王揖唐氏に更迭をみた。新員長は明治十年安徽省の生れ。法政學の出身。生拔きの政治家である

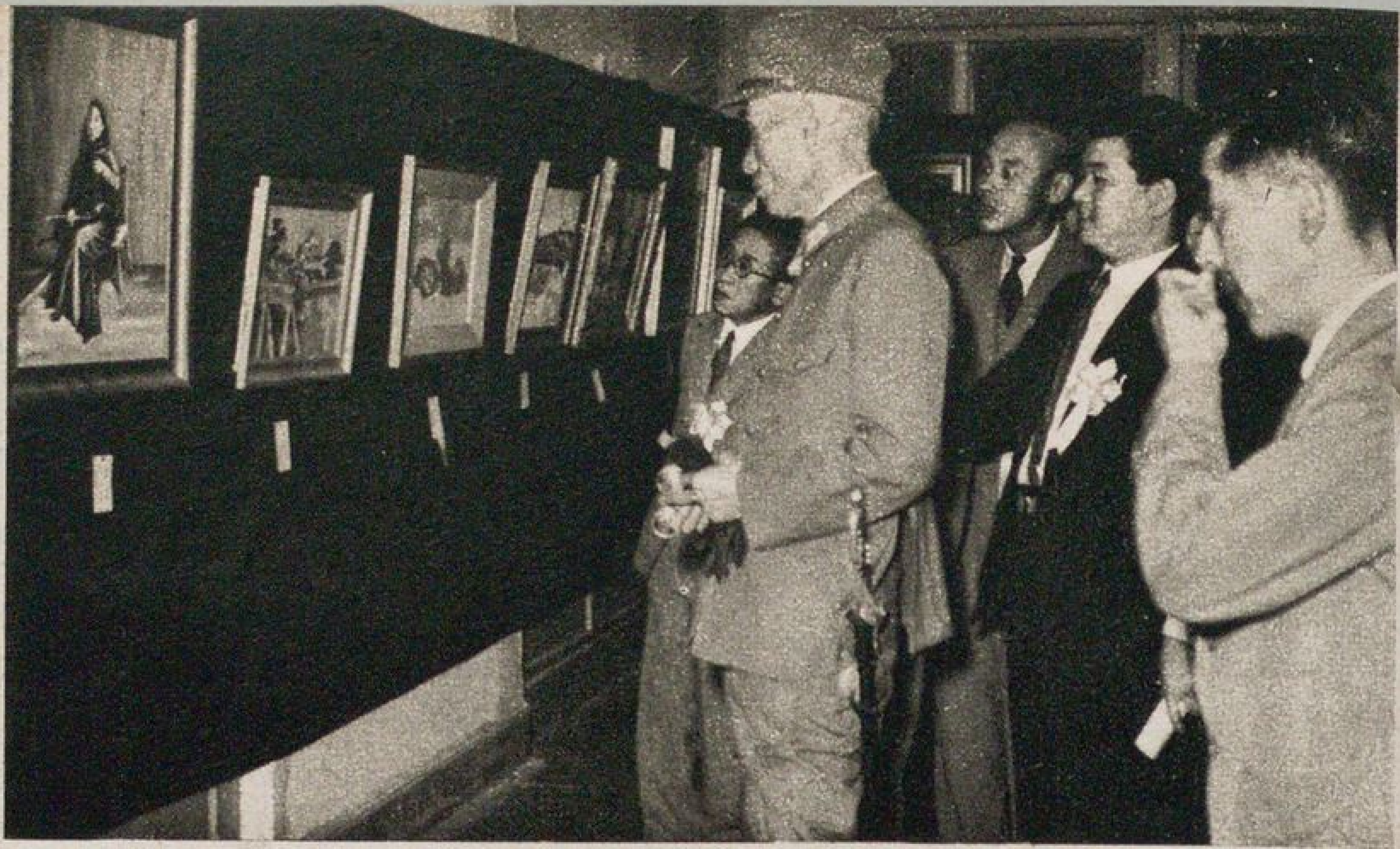
↑



窮乏農民に食糧の原價配給

←

北支蒙疆の鐵道、自動車、水運路迄に組織されてゐる華北交通會社の鐵愛護村三千萬人の村民に對し、同社は從來も屢々食糧、燃料、種子等の價配給を行つて、日華親善、民衆宣に努めて來たが、この程さらに約百圓の食糧を原價で配給した



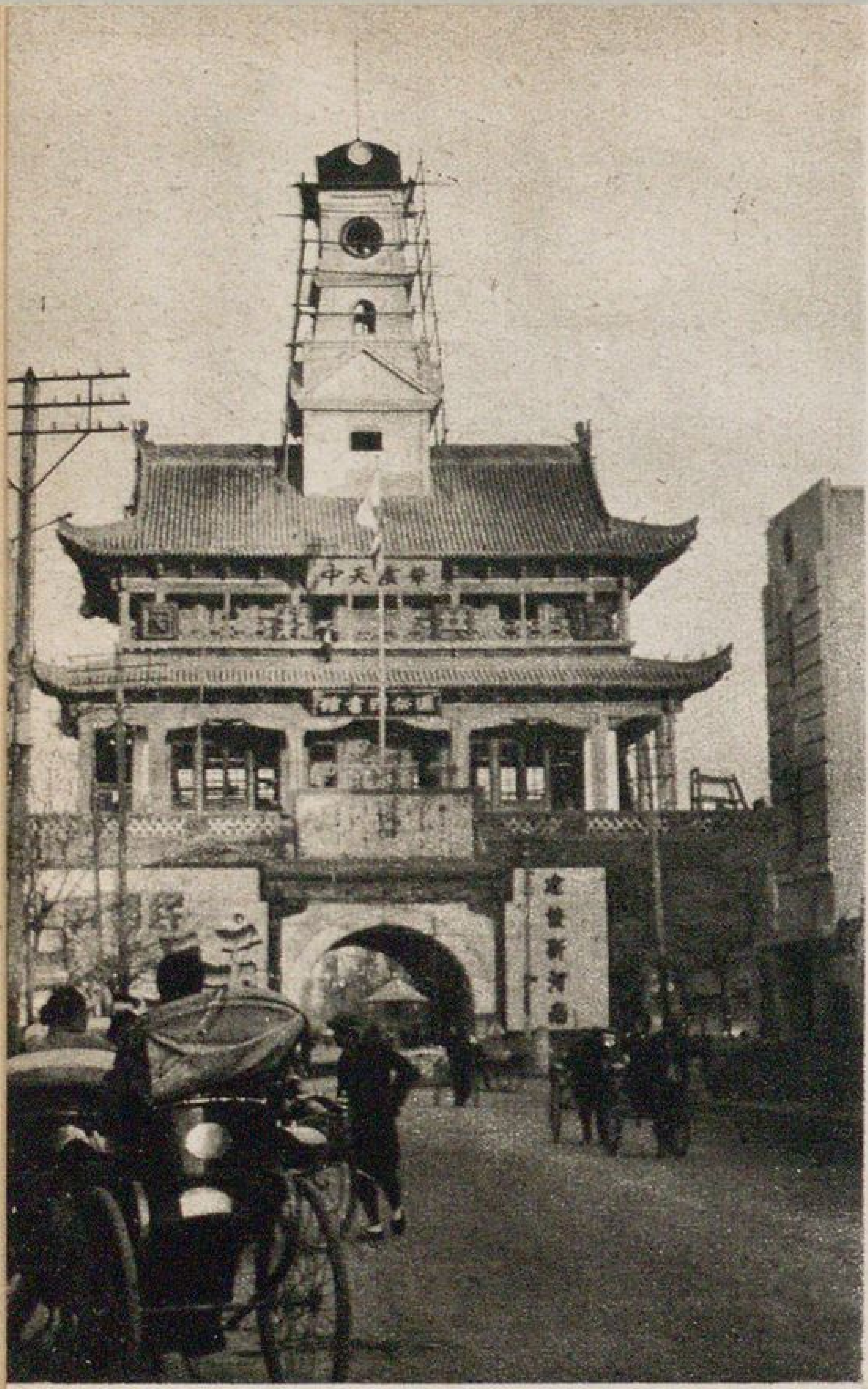
↑
興亞の洋畫展

華北交通社員會では北支蒙疆各地に勤務する十萬の會員から、現地の生々しい興亞の様相を題材に洋畫を募集し、過日來五十點を各地で展覧したが、北京では多田部隊長も來場、カンバスに現れた各地の風景に「ほゝう」と御機嫌であつた

躍進日本を訪ねて

北支の交通路は、吾等の手で護れ……さうした意味で生れた華北交通の愛護村の村長さん一行十七名は、生きた日本の姿を觀ようと、春たけなはな四、五月、別府、大阪、奈良、京都、名古屋、東京等を見學、躍進日本の實情に今更ながら、感激の胸ふくらませつゝ歸つてきました
↓





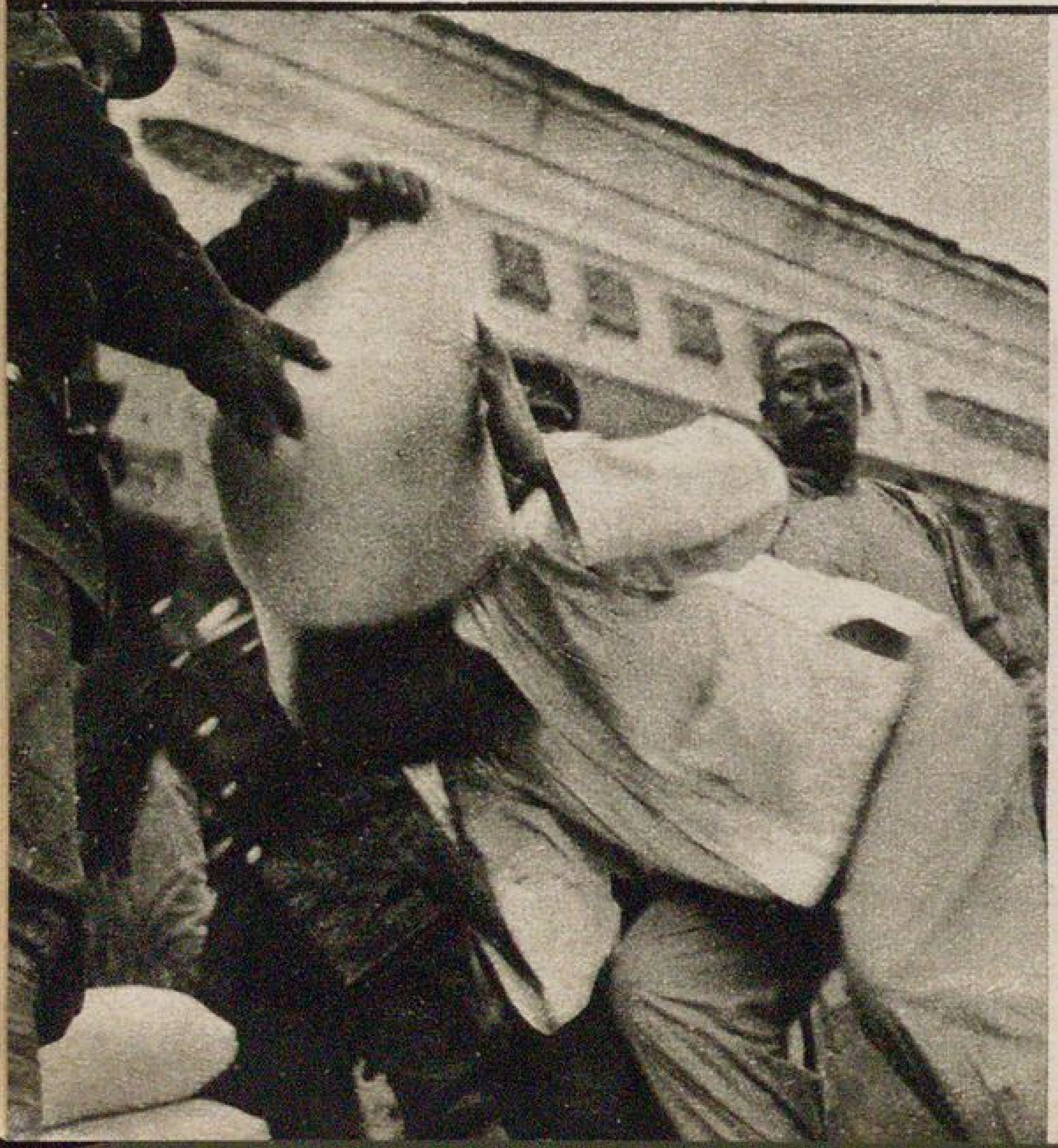
↑
開封鐵路局設置さる

華北交通會社では七月一日を期して隴海線の要衝にして史上有名な開封に鐵路局を設置した。隴海線は黄海に臨む連雲港を起點として陝西の奥深く寶鷄に至る支那大陸を横斷する唯一の鐵道であり、現在は開封まで運行されてゐる。最前線の此地に鐵路局が設置されたことは種々の意味で重視されてゐる

寫眞は開封市街の鼓樓








無敵！國産第一位
ムッソリーニペン
スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産の逸品！
MADE IN JAPAN
新生國策イリヂュウム白金ペン付
流線型
クラウン万年筆
書きよく
體裁優美

中國の蝗害

陶　華　夫

發芽の頃旱魃に傷めつけられた作物の上に大洪水が襲ひ、ついで蝗の大群が突風のやうに來襲して一瞬の中に地上の總てを奪ひ去る、之が昔から中國の農民を苦しめてきた天災の定石である。その災害の範圍が廣いこと、一難去つてまた一難と各種の災厄が繼起すること、更にそれが週期的に繰返すことなど中國農村の災害の著しい特徵であるが、中國の農民は古來かやうに酷烈な環境の中に生き拔いてきたのである。

或る學者の說によれば有史以來中國の蒙つた蝗害は五百回に近く、如何に民衆が之に惱まされ爲政者も手を燒いてきたか想像に餘るのである。最近の記錄によれば大正五年八月、山東省に蝗の大移動があり、膠濟線の或る處では三哩に亙つて蝗の死體が累積し、その死體から滲み出た油のため列車が立往生したといひ、翌大正六年の洪水の後にも、昭和十二年にも昨夏の華北一帶の大洪水の際にも發生し、食糧難に喘ぐ罹災民の最後の糧道を脅かしたのであつた。昔から「大旱蝗災」といつて旱魃と蝗は附きものとされてゐるが、記錄を檢べると洪水の翌年に發生してゐる例が多いので、昨年洪水に見舞はれた華北の今夏八、九月頃は警戒を要するといはれてゐる。

蝗が中國の文獻に現れた最も古いものは詩經の「大田之付」にある「蝗は田畑を荒す賊、之を驅除するのは甚だ困難、地神に祈つて燒殺すべし……」といふ意味の句であらう。ついで「春秋」には年代別に蝗害が見えてゐて、「宣公十五年秋螽、多蝝生じ饑ゆ」とある。螽も蝝も蝗と同類である。春秋二百餘年間に蝗害を受けること前後十四回といはれる。後漢の光武帝は詔勅を下して螟蟲や蝗の驅除を命じ、唐の太宗も庶民のため蝗害の少なからんことを天に祈つたと傳へられてゐる。また三國志にも流賊の害を表現して「蝗の如く現れ蝗の如く掠め去る……」といつてゐる。

明末の崇禎十四年の蝗害は數省に亙り飢ゆる者路上に滿ちたといひ、淸の乾隆二十四年の河南、山東の蝗害には農民は一粒の食も奪ひ盡されて辛くも草根木皮と壁土によつて胃を充し、全省の樹木が悉く丸裸にされたといはれてゐる。民國に入つて以來、驅除法の普及によつて稍〻蝗害も減少してゐるが、それでも實業部中央農事試驗場の調査によれば、民國十六年（昭和二年）山東の蝗害は一省だけの罹災民が七百萬に達し、翌十七年には全國に擴大して被害は九省二百餘縣に及び農作物の損害一億元に上つた、とある。

面白いことには、蝗害に關する文獻を見ると大概、惡政行はるれば蝗害も大きく明君主出現すればその害も少いと說いてゐることである。つまり政治の貧困と腐敗が蝗害の原因をなすといふのである。例へば、歷代名臣言行錄には「明代、山東の太守趙忖の政治が淸明なりしため省境に蝗の大群が發生したけれども忽ち風に遭つて退散し、水に墮ちて死んだ」とあり、宋の宰相王安石の政治の革新によつて天下大いに亂れ蝗害また隨つて起るといふが如きそれである。政治と天災との關聯――いはゆる中國式の記述には大分怪しげなものも多いが一概に嗤ひ去られぬものがあらう。

あらゆる手段を盡しても遂に及ばぬ

內　容

となれば、無智な農民はたゞ天を仰ぎ地に伏し香を焚いて地神に祈るより外にその術を知らない。蝗が天を蔽うて飛來すると「獲罪於天」の啓示だといつて農民はひたすら天に祈る。その結果田畑は冬枯のやうに滿目一靑を止めぬほど蹂躙され果てゝも彼等は沒法子と嘆くのみである。

「唐の開元四年、山東に大蝗あり、民敢て之を殺さず拜し祭る。姚崇、御史を督して州、縣に令し蝗を捕へしむ。人民以て天和を傷くとなす。姚崇曰く、蝗を殺さずんば人民飢死せんと。遂に捕蝗を嚴令して蝗患を絶つ……」

とあるやうに爲政者が命令しても農民は蝗を天の使と恐れて手を出さないのである。蝗を司る神を俗に劉猛將軍といひ、農村には之を祈る廟が多い。その中で最も有名なのは江蘇省梅岡の「螞蚱廟」であつて正面に「昆蟲永息」の扁額があり夏には參詣人で雜鬧するといはれてゐる。北方の天津あたりでは蝗を料理したり家鴨や豚の飼料にするが、江蘇や浙江では蠶のサナギは食つても蝗は食はぬさうである。

大淸律例にも「凡そ蝗（蝻は蝗の幼蟲）の發生する地方では官吏はその上下を問はず必ず農民を使役して之を捕捉すべし、……蝻一斗を捕へたる者には白米五升を給す、若し、捕殺を怠り災害を生ぜしめたる時はその責任者を革職す」と規定してゐる。歷代の政府は各種の捕蝗條例や治蝗規則を出してゐるが、いはゆる「言之諄々、聽者藐々」で民衆には徹底せず、効果は大して擧らなかつたやうである。

中國で最も蝗害の酷いのは黃河と揚子江の下流地方の豐沃な穀倉地帶であつて、浙江省だけでも每年の蝗害は平均百萬元を下らないといはれ、中國の食糧問題に甚大な影響を與へてゐることが判るのである。

或る學者の說によると中國の蝗は八十餘種あつて、その代表的なものは土蝗と飛蝗だといふ。土蝗は體も翅も共に小さく、從つて飛翔力も弱いが、飛蝗は一日に二、三百支里を飛ぶ。

——ある日、南の空に小さな雲が現はれた。最初は地平線に、ささやかな霞のやうに懸つてゐたが、風に吹き漂ふ雲のやうに暫く動かずにゐたのち、やがて扇形にひろがつてきた。……そのうち空は眞暗になつた。空氣は、飛蝗の翅の觸れ合ふ底深い物音で一杯になつた。そして、雨のやうに落ちてくる……

と「大地」（新居格譯）に出てくるのが之である。一度發生するともう手が著けられないのである。その時期は作物が伸び熟する舊曆の五月から八月にかけてゞあつて、古い記錄を見ても大體七八月の頃が最も多い。

最近日本では、榮養價値の高い代用食として蝗の食用を奬めてゐる向があると聞いてゐるが、中國でも、地方的には前述のやうにその祟りを恐れて神聖化してゐる處があるけれども、一般には、昔からやはり拔目なく利用してゐるやうである。淸朝時代にも死蝗を肥料にすると苗麥大いに伸ぶ、といふ記錄がある。江蘇省昆蟲局の分析によると死蝗の含有する窒素分は一〇パーセント以上で燐酸もかなり含まれてゐるといふから、肥料に乏しい中國の農地には成程好適の肥料であるわけだ。

また嘗て蝗害に遭つて豚の飼料に窮した者が試みに死蝗を食はせてみたところ、初め二十斤の小豚が旬日にして忽ち五十斤に肥つたと書いてゐる書物もある。天津附近の田舍には「炸螞蚱」といふ特殊な料理があるが、これは蝗の翅と脚を取去つて油でいためたもので、百姓達は陸エビと稱し舌鼓を打つてゐる。中國三千年來の災厄の一に數へられてゐる蝗も天の配劑、一沫の効用はあるものだと謂ふべきか。

蝗の驅除には昔から政府でも色々頭を捻つて工夫してきたし近來では藥品による科學的な方法を奬勵されてゐるが、因襲的な農民は却々舊套を改めようとはしない。今も昔ながらに幼蟲を手で捕殺したり、松明で飛蝗を防ぐといふ原始的な遣方が一般に行はれてゐるのである。少し進んだものでも、土を掘返し幼蟲を日に曝して殺す法、朝露に止つてゐる奴を布袋で捕へたり、村中總出で箒で叩き落す打圍法とか、幼蟲の發生した箇所に家鴨を放つて食はせるなどといふ姑息な方法を採つてゐるに過ぎず、依然天を仰いで拱手咱嘆する農民大衆なのである。

先祖代々あらゆる天災と軍閥政客の迫害に虐げられてきた結果、たゞ成るがまゝにダニのやうに土地に喰ひついてゐる厄介なこの大衆の頭を改革することは極めて困難だが、現在疲弊の極にある彼等を救ふためには、放つておくわけにはいかない。水害や旱害の對策たる治水事業は、莫大な勢力と資金と時日を要するので早急にはいかないが、蝗害は、その氣になりさへすれば相當の効果を期待し得ると思ふ。政府や新民會などの民衆宣傳と、現在最も優秀な且つ多數の日本人農業技術者を擁する華北交通會社などの科學的研究が望ましい。

（筆者は華北交通資料課員）

北支の農村 14

纏　足

みづの・かほる

「わが日本は支那と古くからの往來によつて、あらゆる文物が海を越えて日本に移されたにもかゝはらず、支那の宦官の制度と、阿片吸飲の惡習と、婦女の纏足の惡弊が傳はらなかつたことは、日本にとつてはまことに大きな幸ひであつた」とは、支那通某氏から聞かされたことである。今回は、この中の一つ婦女の纏足と北支の農村に就て少しく物語つて見ようと思ふ。

北支に居ても、都市或は鐵道沿線から、農村へ一歩も出たことのない日本人は、北支婦女子の纏足も、恐らく一種の獵奇的な存在としか目にうつらないだらうし、これにからまる物好きの變態的な物語りを耳にする位が關の山であらう。今日都市並にその近郷に於ては、纏足は僅かに老ぼれの婦女がその名殘りをとゞめる位で、青少年階級の婦女子の纏足は、殆んど見受けられないので、もはや纏足も社會問題として取り上げるべく時効ものとなつてしまつた。

ところが足を一度農村に入れて見ると、働き盛りの婦女は勿論、青少年期の女子の纏足がまだ到る處に見受けられ、そこには一方に孜々營々と日も尙足らず、額に汗して働く男子があるのに、一方には勞働能力無き畸形の女子が、徒食何等農業生産に寄與するところなく日を送つてゐるのである。そしてかうした傾向は、都市を離れて遠く奥地の農村に這入るほど顯著である。

北支の農村婦女子は一般に、殆んど農業勞働には從事しないと言つても過言ではあるまい。これといふのも、一つには北支の農業が有畜農業であること、二つには北支の農業生産が從來極めて單一な食糧作物の生産に終始してゐたことによつて、日本などのやうに婦女子の纖細な勞働力の必要性が少いとも言へる。が而しこれは比較的少いといふだけのことで、もし肉體的に完全な健康な婦女子で而も勞働を愛好するのでさへあれば、彼女等の仕事と職場は農村にいくらでもあるのである。

ところが不幸にも、宿命的陋習たる纏足が彼女等を不具にし、農業の如き野外の勞働に不適當な肢體にしてしまつた。ある人は云ふ、支那は人口が過剩で、土地の分配地積が少いから男子の勞働さへ餘つてゐるのに、農村婦女子の勞働力など問題になるまいと。然り一應の理窟は左樣であるかも知れない。だがもしも農村婦女子がこの纏足の傳統的惡弊にくゝられないで、日本の農村婦女子の如く北支の婦女子が働くとしたら、或は今日のやうな北支農村の行詰りもなかつたかもしれない。

北支の農業生産は、粗笨な家畜と男子の勞働力が受け持つて來た。もしもこれに纖細な婦女子の勞働力が惜みなく參加協力するならば、北支の農業技術はより向上し、農業生産力はより增大し、更に農村の副業はより發達してゐただらうことを筆者は信ずる。その上この纏足による弊害はたゞに勞働問題にとゞまらず農村社會の經濟に思想に凡ゆる面に作用して、今日農村經濟の崩壞に拍車をかけてゐるのである。

こゝで序に支那の纏足の起源に就て觸れて見よう。纏足がどの時代から、そして何人によつて始められたかは判然しないやうである。たゞ足の纖小なことが、婦人の美の大きな要素であつたことは、隨分古い時代からのことであり、小さい鞋や布で捲くことによつ

て足の肥大成長を抑へたもののやうである。しかし今日見るやうな指骨を折りまげた纏足は、五代時代乃至は宋朝時代にその端を發して居るといふ。

當時は、上流階級の婦女子に於てのみ行はれ、その姿勢は遊人墨客に讃美されたものである。ところが上之を行へば下之を習ふで、元朝の時代に入つてはこの風習が下層階級に染み、明朝に到つてもはや一般的のものとなつてしまつた。かくて支那の婦女子はこゝ六七百年來、男性からその怪奇な姿態を賞でられ、あはれ一不具者として男性の玩弄物になり終つてしまつた。

しかし、世は移り遷つて民國となるや、俄然纏足陋習の打破が叫ばれ、世を擧げて天足（天賦の足）運動が强調されるに到つた。この運動においては纏足の弊害としておよそ次のやうなことがあげられてゐる。

一、天賦の健康體を毀損し自ら不具者となるは人道に反すること

二、纏足が男性の玩弄物的要求より出たもので女性を侮辱するものであること

三、社會人として或は家庭の婦人として纏足が極めて不便であること

四、特に農業の如き野外作業の勞働に從事し得ないこと

五、纏足慣習の打破なくして女性の地位向上は望めないこと

これはある書物で見たものを書き立てたものであるが、筆者より言はしむれば、先づ何より第一に纏足の操作が慘酷極まるもので、如何に非人道的であるかと云ふことである。

筆者はかつて奥地を旅して、六、七才の幼女が無智な母親によつて足を折りまげられ、その苦痛に堪へかねて泣き叫んでゐる姿や、餘病を併發して痩せ衰へた姿を屢々見せつけられてゐるのである。まこと慣習といふものは恐しいもの、母親は、わが娘を愛すれば愛するほど足が氣にかゝつて、夜中に起き出て、大きな石で足を押へたり、或は布で引き締めたり、或は足を天井より吊り下げ血を下ろして足を肥えさせぬやうにしたりする。娘は堪へかねて苦痛を訴へるが、母は愛すればこそと涙をのんでそれを强ひる。全く生地獄の沙汰である。

一體小脚即ち纏足は何がいゝのか日本人の筆者などには不可解であるが、ある文獻によると、上三つ、中三つ、下三つ計九つのよさがあるといふのである。即ち掌上、肩上、鞦韆板上、被中、燈中、雪中、簾下、屛下、籬下で、これを見ても男性の玩弄物的讚美に過ぎないもので、なんの取柄もないことは明かである。それに日本人などから考へればあの歩く格好を見ただけで不快を感ずるのだが、そこが年久しい慣習の魅惑であるのかも知れない。

だが、こゝに筆者の言はんとするのは、上述弊害の第四項の纏足の及ぼした北支農村への影響である。あゝ思へば天災の多き北支の農業に、更に自ら求めた纏足による災厄を背負ひ來りしあはれなる農村に、筆者は一掬の涙なきを得ないのである。

支那では昔から、女は家にありて紡ぎ男は畑にありて耕すのが平和郷のシンボルとされ、それがまた農家の夫婦道であつたらしい。然るに纏足の風が行はれて以來、女の勞働力は低下し、紡織にさへ堪へ得ないからだになつてしまつた。あの北支農村の最も大きな副業とされて來た木綿のはた織りも、今は男の仕事とされてゐるのである。ことに纏足女の不便さ、不能率さにはあきれざるを得ない。男の玩弄物と言はれてもまさしくその通りである。

閑話休題、今や北支の農業も從來の自給自足的な穀作農業から、商品作物たる落花生、棉花、煙草等々の作付が增大し、これらの生産のためには婦女子に好適する仕事が益々殖え、又農業經營の立體化のためには、婦女子勞働力の參加なくしては、到底圓滿な發展は望まれないのである。

かゝる見地から、今後婦女子の農業生産への動員如何は、北支農業開發に重大な影響をもつものである。而も一方北支に於ける農業外への産業建設に男子勞働力の動員が必要とされ、更に隣邦滿洲國の産業開發は、北支勞働力の依存度を高め、本年度に於ける出稼勞働者は、百四拾萬といふすばらしい員數を豫想されてゐる。

かつては人口の過剩、勞働力のはけばに四苦八苦した北支の農村も、もはや北支自體がその不足を憂慮されるまでになつて來た。この時この際、男子の勞働力を補ふべき婦女子勞働の登場が、如何に重要な役割をもつかは、改めて云ふまでもないことである。

北支の婦女子よ、健在であれ、纏足の惡弊と、勞働忌避の封建的桎梏より放たれよ。勤勞精神に目覺めよ。北支數千萬の女性よ、さゝやかなる女の力と自らをあなどる勿れ。立て、立ちて男子に協力せよ、而して北支の産業建設に、そのさゝやかなる一臂を捧げて、おん身等の故郷を平和な樂土たらしめよ。

（筆者は華北交通會社調査役）

可園雜記

加藤新吉

七月七日支那事變の三周年が來た。早くも三年、と理解觀念せらるべきである。桃栗三年、どんな小さな實でもそれが結ぶまでに三年はかゝる。況や支那事變は興亞の百年戰爭の一過程である。その美果は我々の孫か曾孫が收むべきもの、五年や七年で何ができるか。にも拘らず、三年もかゝつたのにと、溜息まじりに呟く人もないではない。氣の短い話である。

事變勃發の當初、北支に送られた兵隊の一人が自分の乘つてきた列車に附いてゐる滿鐵の社紋を見て、これは何かと聞いた。次に滿鐵とは何かと聞いた。彼等の輸送の任に當つてゐた滿鐵社員は大いに憤慨すると一緒にがつかりしてしまつた。もう少しで泣くところだつたと語つた。これが今から三年前の話である。事變が三年經つても濟まぬと悔む人に較べればまだこの呑氣な兵隊の方が賴もしいのかも知れぬ。

日露戰爭の際の國民的興奮と緊張、それはやつと小學校に入つたばかりの子供だつた私にもひしひしと感ぜられたし、今でもはつきりと思出すことができる。が、その戰果、滿鐵、千粁に足らぬ鐵道に對しては我々の記憶に依れば國民的關心が甚だ少なかつた。滿鐵といふ名は其後殆ど全く忘れられてゐたし、たまたま思出された時には伏魔殿だの溫室だの何とかの走狗だのと輕蔑された。支那側の迫害は勿論何時ものこと、それにも增して情ないのは日本の識者と稱する者の滿洲放棄論であつた。さうした環境に於て、滿鐵社員は彼等が信じて 明治天皇の御遺產とするところのものを護り通した。實に三十年悲運の滿鐵を支へ續けた。東亞の今日あるその賜なりといふも過言ではなからう。

滿鐵がいさゝか日本朝野に知られたのは滿洲事變以後の事に屬する。而かも知られた時が日本人によつて邪魔にされ出した時であつた。我等は滿鐵の功績を認める、が今や其使命は果された、解消すべきである、などと言はれ始めた。かくて手を捥ぎ足を捥がれつつある滿鐵である。結局まだ滿鐵は其眞價を理解されないのである。

滿鐵既に然り、華北交通を誰も知らないに不思議はない。字を見た人は支那のバス會社だらうと思ふのも亦不思議ではない。これは北支の鐵道と自動車と水運との綜合經營に當る國策會社です。何と馬鹿氣た說明であるか。之を聞く方でもあゝさうですかと濟まして答へるだけの話である。而かもこの知られず認められざる華北交通の社員は事變の三年を迎へてもう三年經つたかと今更の如く考へる。二三十年、尠くとも十年は踏まれても蹴られてもじつと我慢して鐵道を摑んで離さないんだと覺悟してゐる者には、あつといふ間に經つてしまつた三年である。思ふに華北交通とはさういふ社員をもつ會社だと說明さるべきである。

一歩を踏出せば敵地である。衣食住すべて間に合せてある。六疊に十人の社員が寢てゐるといふのも稀有な例ではない。勿論家族とは別居である。滿洲事變以來面壁ならぬ別居九年といふ社員も居る。殉職既に六百人、その同僚の屍を越えて進むといふのが彼等の信條であり日常である。華北交通とはさうした三萬の邦人社員をもつ會社であると何時かは理解されねばならぬ。

（筆者は華北交通資業局次長）

五原

後藤富男

民國十三年、滿洲軍閥張作霖が中國の武力統一を目論んでゐた當時、現在の蒙疆地區、河南、熱河、陝西、甘肅方面一帶は馮玉祥の西北國民軍の勢力範圍で、ソ聯から武器の援助を得てゐた彼は、張の野望に薄氣味惡い睨みをきかしてゐた。馮は包頭にあつて形勢を觀望し、祕かに張の部將郭松齡と通じてこれに謀反を起させた。然るに事志と違つて郭の慘敗したのが民國十四年十二月二十三日。馮は翌二十四日に天津を押へたが、計畫が齟齬して意圖の如くに運ばない。のみならず、直隷派の吳佩孚が奉天軍討伐軍事の停止を通電して敵手に雅量をみせたので俄然馮の立場は不利に陷つた。かくて翌十五年三月十六日、つひに馮は平地泉を發し、外蒙古首府ウラン・バートルを經てソ聯に逃れたのである。

然るに吳佩孚が國民革命軍に破れて勢地に落ちるや、怪物の馮は直ちにモスクワを發つて、九月十五日五原に到着したのである。それからの彼の動きは活潑であつた。十六日國民軍幹部大會を召集し、十七日には『五原誓師』の大芝居を打ち、總司令に就任すると共に、國民軍全體を擧げて國民黨に入黨した。

中國の開戰と北伐の經緯は本文の主眼でない。馮玉祥の『五原誓師』、機を見るに敏な二股膏藥の馮が洞ケ峠を下つた地が五原であることは興味深い。僻陬の片田舍と思はれる五原が、案外ソ聯の赤い息のかゝつた處であり、また中國革命史上に重要な役割を演じてゐることを指摘したかつたのである。

☆

よく引かれる言葉だが、『黃河百害、たゞ一套を富ます』といふのがある。北支那上古よりの歷史が常に黃河の治水に發展し來たことから判るやうに、强ち百害ではないにしても、黃河の氾濫は北支農民は勿論、爲政者の頭痛の種だつた。然るに唯一つ、後套だけは無條件に利益をうけてゐる。つまり黃河のお蔭で富裕の地だといふのが大體の意味だ。

この後套の中心が、現在の五原縣である。

五原は臨河と共に黃河北方にあるので一見ウラン・チヤツプ盟に屬するやうに考へられる。事實一時その附屬に歸したこともあるらしいが、元來黃河は五原北方を流れ、これを境界にしたのであつて、其後南流するに至つたのでオルドスから切り離されたやうに見えるにすぎない。



☆

この一帶の地は黃河水流の南下に從つて狼山の山麓から現在の水流迄の間に廣大肥沃な平原を現出し、至る處舊河床の底に滲透してゐる水脈と溝渠による河水の導入とによつて、肥沃な黃土は肥料を與へずして農耕することが出來る。

尤もこの後套地方も漢の時代には天然ソーダが地表に眞白く結晶して、あたかも雪の降つたやうな觀を呈し、不毛の荒地であつたらしいが、旣に早く唐の頃より灌漑の方法が講ぜられて、農耕が行はれるやうになつたといはれる。地中に含まれてゐる鹽分やソーダ分を溝渠によつて全く洗流してしまふまでは耕地として再生しないのであるから、その開拓には相當の長年月を要したに違ひない。何れにせよ古くより漢民族と遊牧民族との間の爭奪地點であり、農業支那の前哨であつたから、歷代支那政府は相當その植民に力を注いでゐる。

しかし本格的に開拓が行はれ始めたのは、淸末この地を漢人に開放して以後のことである。王道春といふ農業經營の天才が現はれて、現在見られるやうに溝渠を整備し、これと共に四川、山西、陝西地方の農民が大擧移住して『後套の富』を謳歌するに至つたのだ。北支那には全く珍らしい水田もこの地には經營されてゐる。わが半島同胞も移住し、水田開拓に力を注いだといはれるがその眞僞の程は明らかでない。

五原の城邑そのものは、漢人奥地進出の據點をなし、附近農産物の一大集散市場である。

資料に據つて數字を擧げてみれば、民國二十四年には耕作面積は一六八、二八一畝、穀物の收穫量は二五、五〇〇石、收穫換算高は實に二二〇、〇〇〇圓と云はれてゐる。近來の統計は米は八萬石乃至十二萬石に達すると云はれる。大渠、小渠は三十餘に上る。縣内の農業戸數は七千戸。

耕地も廣大であるが、附近一帶には立派な草地を有し牧畜業の年産も多額に上る。縣城は農産物と共に羊毛、駱駝毛の集散も盛であり、先頃の作戰で五原を占領するや數百萬斤の獸毛が遺棄されてゐたといふ。集積した之等の物資は從來包頭を經て北京、天津方面に輸出された。また外蒙貿易の華かなる時代には年額三百萬乃至五百萬圓の貿易があつたといふ。

なほ所謂有力な赤色ルートとして外蒙古經由ソ聯とかなり密接な關係にあつたことは馮玉祥の『五原誓師』が自ら物語つてゐる。

☆

清末、直隷順徳府の産で、王道春といふ男があつた。十六歳の時に誤つて人を殺し、罪を怖れて故郷を立去つたが、その行先がこの後套の地であつた。後套に來た彼は某家の苦力として雇はれたが、何しろ身長は六尺六寸あまり而も腕力が又頗る强かつた。一鍬で百餘斤の土を掘り返したといはれる。この王道春が五原地方開拓の恩人となつた。

彼は水脈の發見には天才的技能を有し、地面を見れば直ちに水脈の有無を言ひあてたさうだ。他方また、開拓には全身を打込む熱心さで、暗夜地上各處に燈火を置いて土地の高低を測つたり、雨天に不圖姿をかくしたかと思ふと現場に出かけて雨水の轉流する方向を以て測量したり、孜々として倦まなかつた。

彼は或る爭ひから片眼を失つたが、それでもなほ開拓の水利工事だけはやめることはなかつた。當時既に臨河地方を始め附近には天主教堂が蒙地に進出して居り、白人特有の治外法權にかくれて宛然獨立國の如く地方官憲の干渉を排して横暴を極めたが、偶々紛爭が勃發しても王道春は少しも屈せず敢然と强硬な態度を持し、後套開發に邁進し、民國六年五原城中で死去した。

五原地方では、今でも彼の祠をまつり、王善人と稱してあがめてゐる。その死後、人替り治者替り既に二十餘年になるが、五原地方の開拓は續いてゐる。たゞ偉大な指導者を失つてのち、五原が軍閥の苛斂誅求のため、衰頽の色を見せてゐる事實は陳賡賀の旅行記に詳かである。

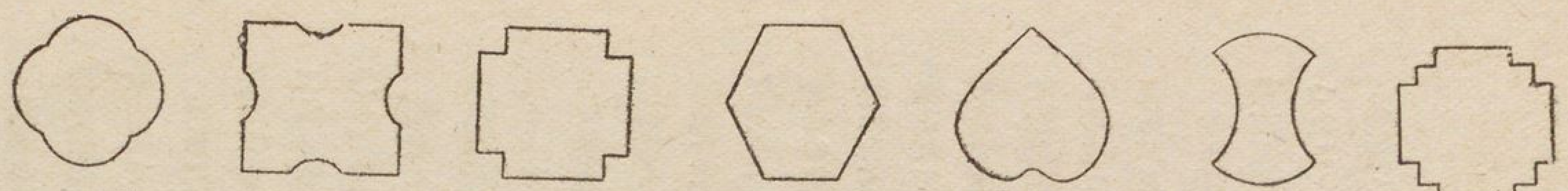
☆

五原の城邑は新舊兩城に分れて、舊城には縣政府や學校があり、新城は商業區域をなしてゐる。新城の方は街路樹も多く、町並も意外なほどに整ひ、約一萬二千の人口を擁する。皇軍の入城の當時は、城壁も街路も破壞されて居り、壁にはベタ〳〵抗日宣傳文が貼りつけてあつた。入城後今日に到る復興ぶりは目ざましいものがあり一時離散した住民も一萬近く歸つて來た。

舊新二城共に泥土の家屋が多いが、役所學校等は煉瓦建の堂々たるものであり、また福音堂や回教寺院も小さな町に似合はぬ威容を誇つてゐる。

五原縣城はかくの如く民國四年以來の新しい町で後套一帶の農業の開拓によつて發展した。開拓の歷史はそれを物語つてゐる。將來治安の回復と共に一層開拓の歩が進められ、中心都市としての五原は經濟的要地として益々發展するだらう。同時に政治都市としても重要性をます事は言ふまでもない。

（筆者は善隣協會調査部長）



支那建築の相稱と變異

小泉丹

大きい家の正面から左右相稱型の中央を奥に行く氣持は支那でなくては味へない獨自なものだらう。私は南京で梁鴻志主席に招かれて維新政府の建物に行つたことがあるが、正面大門から眞直に自動車が入り、それから長い狹い廊下を眞直にいくつかの建物を横ぎつて左右まるで同じなのを見ながら奥の建物まで行つた時の感じは特殊なものだつた。更にまた大きい家では、複雜になつて左右相稱でない感じがする。併しそれは左右相稱になつてゐる群がいくつか組合はされてゐるのであり、その場合にも諸群の組合せは直角になされてゐる。

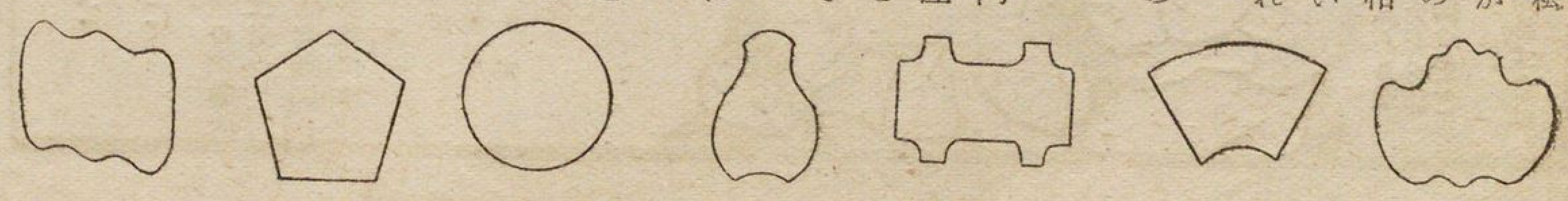
北京で萬福麟の舊宅を見せて貰つて興味深く思つた。息子の嫁取りに建てた一群だの、芝居の舞臺の二つもある一群などが組合はされてゐた。近頃流行の林語堂の『北京の日』(モーメント・イン・ペーキン)といふ小説には曾氏といふ名家の宅が一つの場面になつてゐるが、その息子が傷寒で危篤になり、許嫁の曼妮とその母親の一行が山東から上京して來るところがあつて、病室だの客人の宿泊する室などを具體的に書いてある一節がある。それが複雜で私には見當がつかない。支那の家のプランはきまつた型から出立して、金持はそれを土臺にして第二次的に工夫を加へてゐるのである。紫禁城を見物して廻はると、ぐるぐると曲つてさまざまの建物を通つて行くので、極めて複雜な感じがするが、實際は長方形の建物の左右相稱配置の群が、直角の位置に多數組合されたものなのである。九〇度以外の角度に交はつた通路はなく、建物にも庭にも九〇度以外の隅角は見られず、建物には必らず長い面の中央から入るのである。

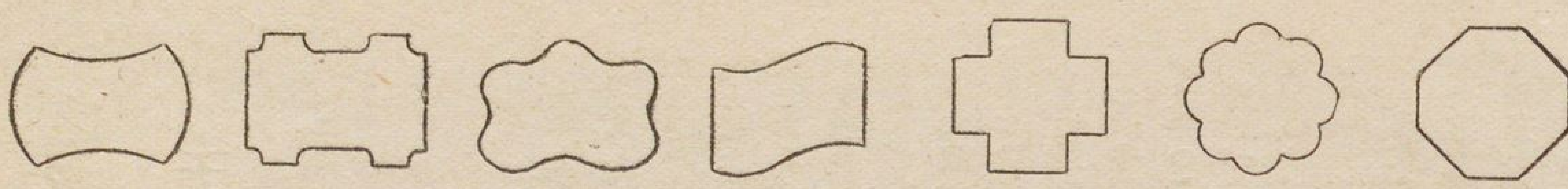
萬壽山の殿堂や亭は紫禁城とは違つて廣い長い地面に建つてゐるが、それでも各群の配置は直角にされて居り、各個は長方形或は方形であつて、建物間の左右相稱が正しくなつてゐない部分は所々にあるだけである。殿堂には張出しがついて凸型になつてゐるものもあるが、その場合でも屋根が獨立してゐるのが見られる。

支那の都城では城壁が大體何れも方形に築かれてゐる。南京城の如き甚だ不規則な形のものもあるが、例外的である。宋の太祖が汴京(今の開封)に都して、五代以來の城壁を擴大する時、趙普といふのに設計をさせたら方形の圖を奉つた。太祖はそれに墨で棒を引いて、歪んだ別圖を書いて、斯くせよと命じたといふ。見識をもつてゐたのであらう。開封の城は其後重ねて增築され、風流皇帝徽宗のもとで、貪性兇謟といはれる蔡京が國政を專らにした時に、方形に改修して美觀を加へた。そして金の爲に北宋は滅びた。かういふ風に歷史に書いてある。方形といふことが支那人の宿命になつてゐるのであらう。

半可通が講釋めいたことをながながと申して恐縮であるが、私がいつてみたいのはこれからのことで、それは支那の建物で、右のやうな左右相稱、直角位な本質に面白い變異を添加する用意がされてゐる點の面白味である。

私が面白いと思ふことの一つは、門の位置である。左右相稱の建物群に於て、本來正面中央にあるべき門が、そこにはなくして、左右、或ひは側方に轉位させられてゐる場合が多い。その位置は如何に轉位されても、直角の組合せは亂されてゐない。この方法によつて、門から入つて主屋に達する迄の單調が破られるといふ味が出てゐる。支那では門が堂々とした大きいものでなく、直ちに壁になつたり、影壁があつたりして、門内は見えぬやうになつてゐる。門を入つて折れ曲つて更に門を拔けて主屋の前の庭の横手から入ることになる場合の感じなどはまことに嬉しいものである。





も一つ面白いと思ふのは、眞圓形で、フレームがあるだけの門、月門といふものである。外の國にも無いことはないが、支那で、九〇度配置の構成に於ける塀の場合に、この大きい圓が實によく活きて感じられる。支那の建物には曲線が可なり多い。屋根にも曲線が出してある。蒲鉾型の屋根などには特に美しい曲線が見られる。柱は大體圓柱である。併し圓柱は曲線といふよりも直線の感を與へる。屋根の曲線は大體輕い。そこにくつきりとした大きい圓形の月門が極めて効果的に働らいてゐる。

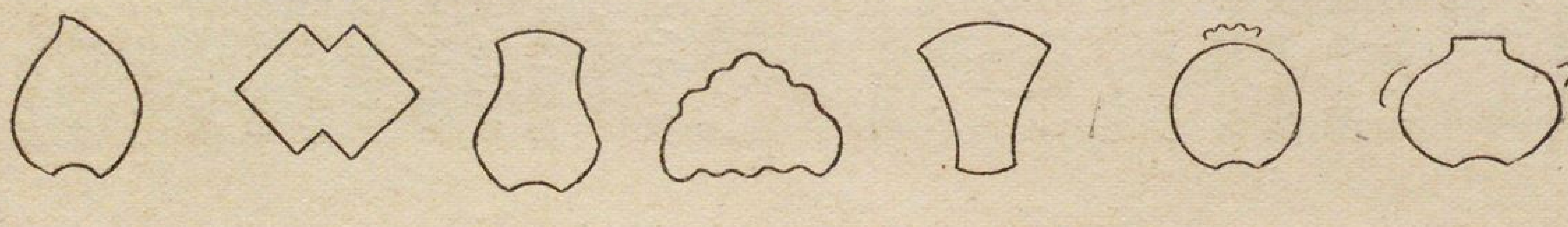
長い直線的な廊下はまことにすつきりした感を與へるものであるが、やはり單調の缺點を免れない。支那建築で之を破る技巧として行なはれたものだと私の考へるのは、それを屈曲さしてゐることである。茲でもその屈曲は正しく九〇度に於てなされてゐるところに特質があるやうに思ふ。私が面白いと思つてみたもの丶一つは、北京の中央公園のものである。あの大きい貴族的な公園の西南の一角に、支那式岩山庭園に面した茶亭があつて、正門から左手に長廊下が池を渡つてそれに通じてゐる。その美しい長廊下は必らず九〇度に曲り曲つてゐる。一直線の部分は長きは數間、短かきは三間位で、その屈曲回數は、四角な茶亭の四隈を加へれば十六回である。萬壽山の長廊は慈禧太后の豪華をすつきりと現はしたものゝやうであるが、あれは排雲殿を中央にして正しく左右相稱になつて居り其の前で二度曲り中央左右が輕い曲線になつてゐる。兩端の長い直線の部分もよいが、曲つたところもよい。恐らく直線の部と曲線の部とあるので双方ともよい感じをもたされるのであらう。

一齊均一といふ事も美の要件であり得るし反對に全體不均一といふ事も同じく美の要件となり得よう。趣味如何にもよる事であらう。町内の若衆一人殘らずお揃ひの浴衣で勢揃ひをするといふ趣向もあるし、何十人ものお客に全部違つた猪口で酒を振舞ふといふのも趣向であるわけである。私は支那建築で相稱的で均齊なものに極度の變異を添加してゐる趣向を面白いと思ふ。

蘆溝橋は今次事變で吾々國民の永世忘るべからざるものとなつたが、それ以前は美しい橋として有名であつた。外國人等はマルコポロの橋など丶紹介者の名をつけて呼んだりしてゐる。私は車窓から眺めたゞけで渡つては見なかつたが、全長二五〇米、十一脚の美しい長橋である。この橋で、その兩側の石欄に百四十柱あつて、その各柱の上に獅子が坐つてゐて、其等の獅子が悉く同一でないと書物に書いてある。寫眞で見たゞけでは氣がつかぬ程度である。これほどの變異（ヴエリエーション）を現はすには苦勞がかゝつたことだらう。萬壽山に十七孔の長橋がある。私は之も實際に渡つては見なかつたが、『橋欄柱上雕鏤小獅形態各異』と案内記にある。此等兩橋に於て、この細かい趣向がどれほど効果的になつてゐるか、實見しない私にはわからないが、この種の面白味のあるものを一つ二つ實見した。

土塀に列んで窓をつける場合、日本でも外國でも一樣なものを列べるのが普通のやうに私は思ふ。ところで支那で見ると原則としてそれを別々にしてゐるやうであるのを面白いと思つた。窓の形は一樣にして、それに嵌め込んだ瓦細工が窓毎にさまざまに變化さしてある。私はそれを寫生してみて、同じ四分の一圓周の瓦を用ひて、變化させ得る範圍の廣いものであることに驚いたわけだつた。このやうな細かいところでなく、窓の形にもこれが見られるのが面白い。一例をあげよう。またしても萬壽山を持ちだすが、慈禧太后の住まつた樂壽堂の一廓の湖に接したところに左右相稱の塀があつて各一回九〇度に折れてゐる。そこに小窓があけてあるが、その數左右十五づゝ合計三十ある。而して面白いことには一つとして同じものはない。簡單にスケツチして來たものを挿畫として御覽に供する。圖には二十八しかないが、窓枠は同じであつて壁に加工がしてあつて別に見ゆるものがあるのを除いたからである。このやうに三十通りも列んだのは珍らしいであらうが之と同じ趣向で五通りか六通りを列べたものはあちこちでみられた。

（筆者は慶大教授醫博）



支那建築の話 (7)

天井と炕

村田治郎

天井と書くと支那では主に中庭のことであり、また場合によると敷石の溝のことを指すさうだが、私がここで天井としたのは日本流にテンジヤウの意味である。

支那の住宅ではテンジヤウを大抵は紙貼りですませてゐるやうだが、しかし、宮殿や廟の建築となると、立派な天井が設けてあるか、又は全く天井がなくて梁や垂木がそのまゝ下から見えるのが普通である。それらの中の立派な天井のことを少し述べておかう。

驚くべき見事な天井が支那へあらはれたのは、文獻によると遲くも漢代からのやうである。後漢の張衡といふ人の「西京の賦」に長安の都をたゝへ、未央宮や閶闔門の美をうたつた一節に

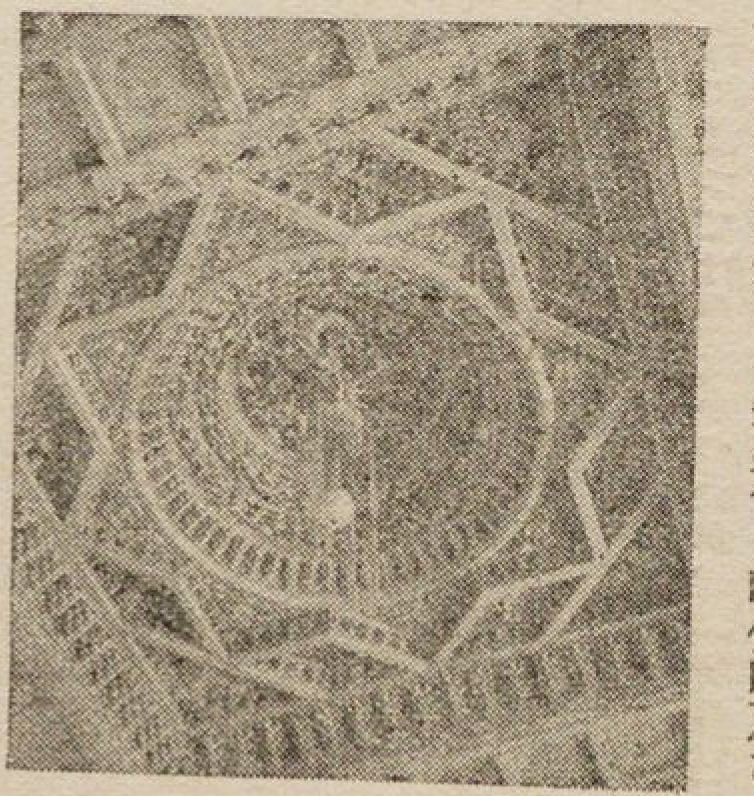
倒茄を藻井に帶し、紅葩の狎獵たるをひらき

といふのがある。藻井といふのは木を縱橫に組んで井の字の形につくつた天井のことで、それに蓮華がさかさまについてゐて、紅い花瓣が出たり入つたりしてゐるのを讃美した文句である。

これに類するものは後漢・魏・晉の賦に多く見え、それによると藻井のほかに綺井としたのや方井とした場合もあつて、井の字形のテンジヤウが立派な建築に多く用ひられたことがわかり、井の字形にしたのは多分構造上の必要からでたと思ふが、しかしまたその裝飾に蓮のやうな水に緣の深いものを用ゐてゐることと結びつけて、火災に對するマジナヒとして用ゐたのだと支那では昔から說明してゐる。

最も美しく且つ古い天井の例は雲岡石窟で見られる。四角な木を縱橫に組んで出來た幾つもの井の字形の、いたるところに天人や蓮華をまきちらしたやうな彫刻は、前に記した賦の文句などの遠く及ばない複雜さと華麗さとが認められる。雲岡の蓮華彫刻などは印度系統の影響を多くうけ入れてゐるので、後漢などの賦に出てくる蓮華とは或は表現が少し違ふかも知れないが、しかし天井を蓮華などで飾り立てようとする技法そのものは、恐らく賦に出てゐるものに近く、支那本來の性質が少なからずこもつてゐると思ふ。と同時に西方のギリシヤ、ローマの古建築にもほゞ之に似た天井があつたことを顧ると東西の天井に何等かの繫りが早くからあつたとさへ考へたくなる。

新疆の敦煌千佛洞の天井は雲岡のほど立體的でない代りに、非常に多くの彩色模樣が施してあるばかりでなく、その形にも井の字形とは違つた場合があり、中には木造建築にはなかつたとさへ思はれるやうな形まで使つた例が珍らしくない。かうして見てゐると天井の裝飾技法にも多少乍ら時代的及び地方的差異が伴つてゐたやうである。



紫禁城養心殿の天井

近世の天井で最も手のこんだ豪華な作品は、北京の諸宮殿で見られるが、多分清末以後になると西洋文化の模倣が著しくなつたせゐか、電燈の大きな球がつけられて、今までとは餘程趣きの違つたところがあらはれて來た。しかしさういふ場合にも、在來の調子とまるで違つたものを平氣でぶらさげたといふやうなことがなく、巧みに支那的要素を活かしながら新設備をしてゐるところは、やはり宮殿のやうなものになると相當の建築家が居たのだと云ふことを推察せしめるに足ると思ふ。

廟や寺の大殿でもさうであるが、とくに北京の宮殿では玉座の上などにあたる部分が、ほかの天井よりも一段高くなつてゐることが多く、しかもその形が普通の四角や八角とは違つて、複雜な區切りがつけられてゐる場合がある。宋の李明仲といふ人が編纂した「營造法式」といふ本は、宋時代またはそれ以前の建築技術をしらべるのに重要なものであるが、それに鬪八藻井といふ天井の記事があり、鬪十八、鬪二十四などとある繪と北京宮殿の一段高い複雜な區劃つき天井との間には、かなり近いつながりが認められる。さうして見ると北京の宮殿そのものは清代の作であつても、中には古くからの傳統的手法が使はれたところがあり、支那はやはり保守的傾向が強かつた國であることが感ぜられるのである。

◇　◇

炕は冬季の煖房法として北支の住宅

に缺くべからざるものになつてゐるが南は一體どの邊まで及んでゐるのだらうか。盧龜白月恒といふ人の「中國人文地理」に東は泰山から起つて北緯三十七度の線に沿うて少し南に下り、山西南部から西安・甘肅へ至る線から北に炕を用ゐてゐると述べてゐるが、大略はそんなものとも言へよう。尤も黄河を渡つてもなほ炕があることは事實だし、淮河附近に至つて漸くなくなつたとも聞いてゐるから、河南省でもかなり南まで炕がある譯で、正確に言へば三十七度どころか更に南の北緯三十三度位から北としなければなるまい。

今では炕は北支の大衆生活から切りはなし得ないほどしみこんでゐるが、しかしこれが支那固有のものかどうかは甚だ疑はしい。まるで推察にすぎないが北支に炕がひろく用ゐられるに至つたのは、金代に於ける女眞人の功績ではなからうか、それを更に根強く植ゑつけたのは清代の滿洲族ではないかとさへ私は想像してゐる。つまり炕は支那人が滿洲方面から而も中世以後にうけ入れたものではないかと思ふ。

炕のことが最も早く記されてゐるのは、北魏時代の著書たる「水經注」であつて、河北省東部の豐潤縣附近の或る寺で僧侶が使つたといふのであるが、しかし附近の一般民衆の住宅にはなほ珍らしいものだつたらしいから、炕が北魏時代に河北省で普及してゐたのではなからう。それよりも少し後のことになるが、唐が遂に討滅してしまつた滿洲東部の高句麗民族は、その住宅にすべて炕らしいものを用ゐてゐたといふことであり、また渤海國でも同樣であつたらしいことは、その首都龍泉府（今の寧安縣東京城附近）の宮殿阯を發掘した結果によつて推定せられる。宮殿阯にあつたのは今の炕のやうに發達したものでなく、板石と泥とで築いた幼稚な構造に過ぎなかつたけれども、炕と認めてよいものであつた。

金國を建てた女眞人が炕を用ゐたのは、當時の宋の人達が記載してゐるので確かである。しかも金の炕は餘程發達してゐたものらしく、室内の周圍に炕がつくられて其の上で寢食起居をしてゐたといふ。炕といふ名稱が文獻にあらはれたのも此の時からである。

ずつと後の清代になつても支那から滿洲東北方面へ流された人達が、滿洲の炕は支那のよりも發達してゐるのに驚いてゐる。北京の宮殿などに於ける大きな炕は別として、普通の民家の炕を比較すれば現在でも滿洲東部及び北部の方が大規模なのを使つてゐる。つまり滿洲の寒さが、炕を發生せしめたとも考へられよう。何れにしても文獻及び遺例から見て滿洲の炕は非常に古くから民間に普及してゐたもので、その點支那の民家と全く違つてゐたとしか考へられない。朝鮮のオンドルは勿論滿洲東部から傳へられて次第に南方へひろまつたもので、現在でも南よりも北の方が發達してゐるやうに思ふ。

北京宮殿とか北京の諸王府などの炕は非常に大仕掛けのもので、普通の煉瓦敷きのユカとしか思はれない廣い一室全體が、實は炕になつてゐるといふ狀態で、勿論炕としては最高の發達を示すものであるが、こんなのは普通の住宅と桁が違ひすぎて問題にならぬ。

支那の普通の住宅では、一室の前方又は後方の壁に沿うて、奧行き五尺五寸位から六尺位、長さは室の全長にわたる炕をつくるのが普通であるが、滿洲民族の炕は一室の三方にコの字形に炕がめぐらされてゐるのが多かつた。それは北京の宮殿でも滿洲固有の祭儀を行つた坤寧宮で見られ、奉天故宮の清寧宮や奉天北陵及び東陵の一部にもあり、また現に北滿洲の諸地方の住家で經驗するところであつて、これを一つに卍(マンジ)炕とも呼んでゐる。

筆者は工博・京都帝大教授



北京の俳優と艶ごと

宇　澄　朗

今はよほど變つて來たことであらうと思ふが、日本では歌舞伎役者——ばかりではなくいはゆる新派役者も——と花柳界とは、色々なことで隨分やゝつこしい關係と交渉とが結ばれて、木挽町や久松町のお芝居をあけるに、なにも一々新橋や柳橋にお伺ひをたてるわけでもあるまいが、それでも大名題は兎に角、たいていの役者は昔どほり依然として花柳界を御挨拶に廻はる。旅興行となれば、その渡りが殊に緊要とされる。

一昔前の引幕といふものは、どれもこれも殆んど藝妓連の艶つぽい贈物であり、そして役者の女房はまづ藝妓、藝妓ならずとも北里のお茶屋の娘さんといつた女性に限られ、役者と藝妓との艶ダネゴシツプは盡きぬ濱の眞砂のそれにも似て餘りにも多い。これを總じて日本の役者——築地あたりの人々は何うか知らないが——は艶つぽい雰圍氣に生き、また日本のお芝居も座中役者の艶つぽい關係のつながる花柳界を離れては立つてゆけないといつてもいゝくらゐである。

ところが、北京の俳優——こゝでは東京の歌舞伎といつたやうな北京の京劇役者をいふ——は、日本のそれとは全く違ひ、艶ごとは大禁物とされ、恥辱とされ、そしてそれがいとも嚴格に遵られてゐる。

芝居道の相異つた慣しである。

◇

北京の劇場に這入つて、棧敷高土間といつた包廂を見渡しても、いかにも御ひいき筋といつた姸でやかな藝妓や半玉たちが滿艦飾で幾つものボックスを占領してお雛さまのやうに納つてゐる光景は、北京の劇場では全く以て見られない圖で、たまにはお客に伴れられた藝妓の姿を見ないでもないが、日本人の眼に感ずるいはゆるお芝居情緒を浮きたてる花柳界とのつながりが、餘りにも寂しすぎるくらゐに稀薄だ。

幕をみても、花柳界から贈つたものなんて絶無で、また假りに南方から名優が北京にかゝつても、北京の八大胡同に大勢力を占める南方藝者から、幕はおろか、一條の幟も一束の花輪すら贈られない。

それほど北京の俳優と花柳界とは沒交渉である。從つて役者の藝者遊びもなければ、また藝者を女房にしてゐる者もなく、北京梨園の慣しは役者の女房は役者の娘に限られ、梅蘭芳が女優の福芝芳を女房にしてゐることさへ、異數の例外とされてゐる。

人氣稼業でありまた浮氣稼業の役者が、何故そんなに艶ごとには石部金吉なのか。一種奇蹟みたいな現象に思はれようが、それにはちやんとした理由がある。艶ごとに荒むと、唱（うた）を主藝とする北京俳優にとつては命にも等しい大切な喉を壞す多分の懼れがある。それが内的理由の一。と共に役者の艶聞は、やゝもすれば甚しき社會的非難を浴び、名聲人氣を臺なしに墜してしまふ。それが外的理由の二。

◇

さうはいふものゝ何んといつても舞臺の上の美しくもまた華々しい稼業、自動的にも他動的にも、艶ごとが決して絶無だとはいへない。

一昔前のこと、梅蘭芳の妹婿の當時賣出しの女形徐碧雲と或る後家さんとの艶ごとは、北京劇壇罕れな椿事としてずいぶん世間を騷がせ、結局、徐碧雲は梨園から葬られてしまつた。

また滿洲落ちの劇の人氣役者元元紅が時の吉林督軍孟恩遠のお妾さんとへんな噂がたつてひつくゝられ、なにしろ相手が虎將軍の異名のある暴督軍、激怒のあまり元元紅を活埋めの慘刑に處したこともある。

かういつた艶ごとのうち、誰れもが知つてゐる有名な出來事は、上海の武劇役者李春來事件であらう。その立廻はりの型のよさ、凛とした男ぶりの美しさ、武生には稀れにみる玲朗な喉、その彼れにぞつこん魂を奪はれて血道をあげたのが、要人黃京卿の寵妾朱桂珍、女の方は燒きつくやうな熾烈な色戀、男は色と慾との二筋道、女から巨萬の金を引き出させ、李春來の春の字と朱桂珍の桂の字をとつて春桂といふ劇場を建て、その座頭に收つて滬上劇壇の覇業を夢みたまではいゝが、黃京卿の友人たちが義憤の烽をあげ、廣東同鄕會の檄となつて嚴重な處分方をお上に迫り、遂に李春來は逮捕投獄といふ大變な騷ぎを捲き起したこともある。それは前清光緒末年のこと。

相當名を賣つた役者の艶ごとは、ここ三十年間、そんなことしか憶えてもゐないしまた傳つてもゐない。

筆者は北京在住日本通中國人

個人主義

石原巖徹

この題目（個人主義）は必ずしも完全に該當してゐないと思はれるが、一寸他に適切な語彙がみつからないので暫くこれを用ふることにして置く。

支那人の處世訓としての俚諺に「各人自掃門前雪、休管他人屋上霜」といふのがある。直譯すれば「自分の家の門前の雪を掃けば好い、他人の家の屋根に霜が降らうがかまふな」といふことになる。これは無論言葉のあやから雪だの霜だのといふ媒材を使つたのであるが、他人の家の門前の雪に言及しない點が面白いと思ふ。霜は雪よりも輕微なものであるから、雪は無論のこと、霜ほどのものでも他人の事にはかまふなといふ意味に解釋すれば一層よくこの諺の生れた理由が判る。但し支那人自身はさう解釋して使つてゐるわけではなく、彼等は「他人の家の門前の雪を掃くことはない」といふ意味に解釋してゐるのである。

日本流にこの諺を解釋すると、「自分の頭の蠅を逐へ」「自分のことを棚に上げて他人のことばかり責めるな」といふやうに取れるかも知れないが、さうした意味の戒めとは全く異り、「他人のことに干渉して餘計な心配をしたり藪蛇になるやうな虞れのあることはするな」といふ消極的な自己保全主義—言外に「さはらぬ神に祟り無し」の意味も含めて—から來てゐるのである。即ち一種の個人主義的思想である。若しこの諺の意味が、日本流の解釋の如くに各人の「自らを修めること」を戒めるものであつたとしたら、支那の社會はもつと異つたものになつてゐたであらうと思はれるが、事實は全く「他人のことにかまふな」といふ意味に用ひられてゐるのである。支那人の社會生活—政治經濟等一切を含めて—はかうした個人主義に依て營まれてゐることを先づ認識して、すべての問題は考へ且つ處理されなければならぬ。

一例を擧げれば、公德心といふ問題は日本でも明治開國以來識者の間に叫ばれて、今日に至るも未だ言はなくてすむといふ程度には進歩してゐないと思はれるが、支那はそれが一層に甚しい。といふのは前述の如き處生訓を遵奉してゐるので、その必要が無いからである。必要が無いといふのは語弊があるが、彼等の個人主義は徹底してゐて、自分が個人主義であると同樣に他人の個人主義をも容認してゐるからである。

然しながら、支那人の個人主義はあくまでも、支那人だけで作つてゐる社會に於てのみ適合するものであつて、國際交通の發達した今日、殊に日支關係が密接になつて來た今日以後、これは修正されなければならない運命にある。支那人自身の間でも、近代的に、或は國際的に眼醒めて來た人々は、このことを痛感してゐる。但し痛感はしてゐても、筆者の觀る所では、彼等は一圖に「中國人は野蠻だ」「文化が遲れてゐる」といつたやうな自嘲的感傷にのみ囚はれて、その個人主義思想の存在及び由來に對して自己反省を加へ、思想的に之を修正するといふ努力に缺けてゐると思はれる。

近頃「東亞新秩序の建設」が口頭禪的に唱へられてゐるが、眞にそれを實現する誠意があるならば、日本は固より支那も、かうした根本的な問題から手を着けて行かなければならぬと信ずる。

（筆者は華北交通旅客課主任）



傳書鳩

七千愛護村に井戸の贈り物

華北、蒙疆の農村は毎年旱水害の爲その收穫をいためられてゐるので、華北交通會社では之が對策として十ケ年計畫で鐵道自動車、水路兩側の七千ケ村三千萬の愛護村民に鑿井を奬勵し地下水利用による旱害防止に乘りだす事になつた。實施に當つては全愛護村を棉花地帶、小麥地帶、一般地帶の三地區に分け、棉花地帶を第一期、小麥地帶を第二期、一般地帶を第三期とし、同社の指導で愛護村民自體の努力で、毎年繼續的に行はんとするもので、先づ本年度は北京、天津、濟南三鐵路局管下の棉花地帶から實施することに決定、既に專門技術者を調査に派遣したが、今年は大體五百箇の鑿井を目指してゐる。

日本鯉、大陸にお輿入れ

新中國の產業開發と日華親善の使命を帶びて日本鯉が大陸へ——山西省太原の○○部隊の軍屬であつた長野縣南佐久郡の篠原要一さんは、駐屯中に同地方の氣候風土が養鯉業に好適するのに目を附け、日本鯉を大陸に輸入紹介してはと同部隊宣撫班に献策したところ、名案だと贊成を得たので直に長野縣南佐久水產會へ諮り、日華親善の一助にもと大乘氣ですぐに輸送の手續をとり六月末までに十萬尾を試驗的に朝鮮經由輸送することになつた。何分にも氣候風土水質の異る大陸、殊に四千キロに上る長途であり全部が全部無事で運ぶことが出來るかどうかは疑問であるが、關係者もこのお目出たい輿入れを何とか成功させようと萬全を期してゐる。

蘭學事始の中國版

草根木皮の研究を主とする經驗醫學、いはゆる中國の漢法醫學が、初めて歐洲の實證醫學の洗禮を受けたのは大體十八世紀の初期、淸の時代で、當時英邁をうたはれた康熙帝はこの歐洲醫學を讃美して、フランス人宣教師に醫學を進講させ、さらに醫學書を滿洲語ならびに漢文に飜譯し、これを秘藏せしめたのであるが、いままでこの飜譯書の實物を見たものがなく、已に消失したものとされてゐた。ところが最近京都帝國大學中國留學生として北京に滯在、東洋史ことに淸朝時代の研究に沒頭してゐる學徒今西春秋學士が研究資料蒐集の際、圖らずも某滿洲旗人の家に秘藏されてゐたこの滿洲語の西洋醫學書を發見、我國の杉田玄白著〝蘭學事始〟にも匹敵する中國醫學の革命的文獻として學界の視聽を蒐めてゐる。尙該書はその後滿洲醫科大學當局の懇望により同大學の藏書として永く保管されることになつた。

猛暑をふつとばす珍妙氷嚢列車

濟南方面の暑さは室內でも百度を下らぬといふ猛暑振りを呈してゐるが、この暑さに備へるため華北交通會社濟南鐵路局では旅客サービスとして、青島と濟南を結ぶ膠濟線に珍案の氷嚢列車をデビューさしたところ、俄然旅客連の壓倒的賞讚を浴び氷嚢に羽が生えた樣な好賣行を示してゐる。この氷嚢は一個十錢で氷が溶けたら車內で自由に取替へることが出來ると云ふ珍妙だがなかなか便利な代物である。日華旅客連一樣に頭に載せたり、額に押し付けたりして「これは涼しい」「這個很好」と異口同音に絕讚を浴びせてゐる。

日本の古典を中國に紹介

古く中國文化の渡日にともなふ漢文漢詩の日本譯書は枚擧に遑のないほどであるが、反對に日本固有の古典文學書の中國語譯には特筆すべきものが一書もなく、從つて中國への日本古典の紹介は殘念ながら見るべきものがなかつた。ところが事變後日華文化の提携が新秩序建設の線に沿つて强く叫ばれるに從ひ、中國人の間に日本精神の研究熱が昂まり、日本古典の中國語譯による紹介が盛んにならうとしてゐる。殊に日華讀書人の多大の期待を集めてゐるのは北京大學文學院教授錢稻孫氏の「源氏物語」と「萬葉集」の飜譯であつて、更に古事記、日本書紀の中國語譯を傳へられ日華學界の關心を深めてゐる。

北京より開封と太原へ直通列車

華北交通會社では山西の中樞太原と河南の要衝開封の飛躍的發展に備へ、七月一日を期し夫々直通列車を運轉することとなつた。この直通列車運轉開始によつて從來太原方面行は石門（舊石家莊）開封方面行は新鄕で夫々乘替を要したのが不要となり、且つ北京、太原間の下りは二時間上りは一時間の短縮となり、北京、開封間の直通によつて新鄕一泊の不便が除去された譯で、山西、河南兩地への旅行者は多大の便宜を得ることになつた。

鮮魚輸送用の冷藏車を新造

鮮魚に飢ゑてゐる奧地の日本人に、新しいピンピンした魚をその食膳に上せようと華北交通會社では、今夏より鮮魚輸送用

の冷藏車を新造してその要望に應へることになつた。この冷藏車は貨車の外側と外氣の暑熱を絶縁する構造で、內部には氷一瓲入りの鐵製桶を四箇備付け、完全な移動冷藏庫といつたものである。これで眞夏でも魚の品質を損ずることなく生のまゝ遠距離まで送ることが出來るのである。目下同社の本社はじめ各鐵路局の配車當局では、その到着時間を一時間でも早くするため冷藏車の連結列車を選定、また列車から列車への繼承を迅速にするなど鮮魚輸送の萬全を期してゐる。

支那馬の體質改良

支那馬の體質、力量が各國の產馬に比し甚だ劣等であることはよく知られてゐるが、この事實を國防上或は農業上に對照してみるとき、新支那の將來にとつて甚だ心細い限りである。從つてこれが改良增產計畫は必然的要求として過去數年來に亘り種々研究されて來たが、今日まで種々な事情から實現が阻まれてゐた。所が今回、農村の復興を圖り同時に新支那將來の國防に萬全を期さうと云ふ大局的見地から、天津特別市公署並びに天津市を中心とする近鄕の各支那側官署が一致協力し我が〇〇部隊の積極的援助を得て、農家に飼育されてゐる支那馬の本格的改良に乘り出すことになつた。

天津縣に水田地區

食糧不足の北支に內地米に劣らぬ米を生產しようと云ふ朗らかな計畫がある——天津建設總署並びに新民會では北支當面の糧食入手難を打開、自給自足を行ふため近く天津縣一帶に亘り大水田地區を建設、既に建設總署の手によつて行はれつゝある永定河の灌漑施設の完成と相俟つてその具現第一歩を示すことになつた。

この大水田計畫は白河に合流する各水系附近を中心とした全天津縣及び隣接地區で、既設水田地區たる小站、張貴莊、軍糧城附近を擴大、天津縣地域を全面的に水田化し百萬石の現地米を收穫しようといふ大計畫である。

華交經營の水運路三千余粁に及ぶ

天津（特三區）、塘沽、塘沽北砲臺および通雲の各碼頭並に小清河、南運河、子牙河、薊運河の內河川の汽機船による運送を行ひ、水陸一貫運營に當つてゐる華北交通會社では、四月一日から中國內河航運公會の業務を承繼して船舶行政事務を代行し、民船の統制指導を開始したが、更に大清河（天津—保定間二一六粁）子牙河（天津—邯鄲間七五五粁）南運河（天津—新鄕間一、〇六九粁）小清河（北商埠—羊角溝間二六六粁）大運河（南旺鎭—准安間六〇三粁）北運河（天津—通縣間一四三粁）東北河（天津—胥各莊一三九粁）の各主要河川につき、計三一九一粁に及ぶ民船貨物運送營業をも開始した。この運航開始は內水航運の振興を圖り治安民生の向上に資するものとして各方面から大いに期待されてゐる。

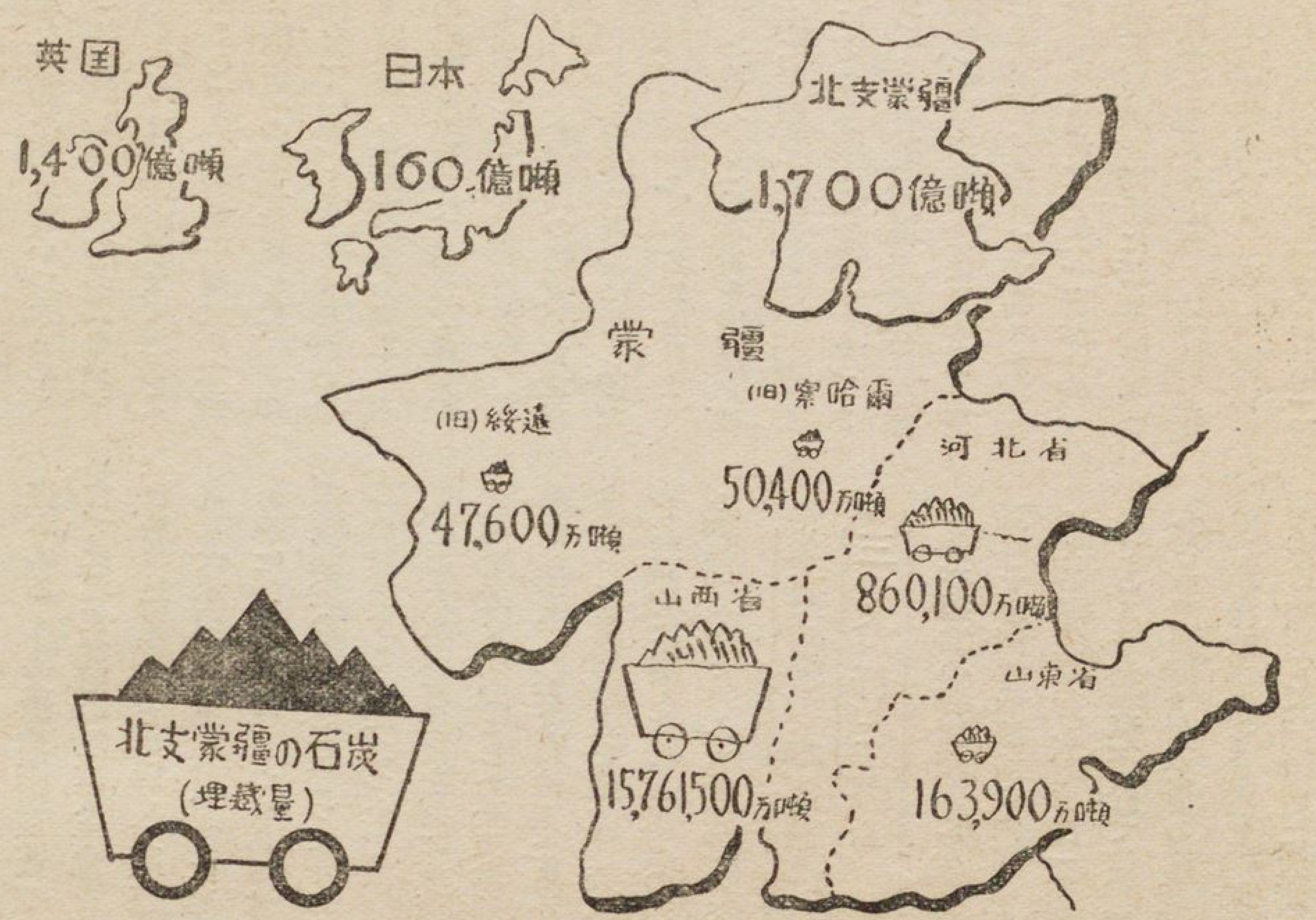
北京大學生の中國農村調査

中國農村の調査はわれ〳〵の手でと北京大學では、今夏六月から七月末日まで一ケ月間、華北交通會社が組織してゐる鐵道愛護村の戶口、敎育宗敎、農家經營の規模及樣式、作付面積、生產額、村民の移動狀況、勞働力等々を調査した。この試みは八千ケ村、三千萬の愛護村民の現勢のみならず延いては最近に於ける中國農民の動向を知る唯一の貴重な資料を得た點に於て劃期的成功を收めた。從來、クレツシイやバツクなど外人專賣の觀があつた農村調査に日華學生が手を染めだしたのは、現地で大好評であつた。



石炭

北支・蒙疆の統計1



支那の石炭が有名になつたのは、一八七〇年ドイツの地質學者リヒトホーヘンが山西の諸地方を踏査し、山西一省で一兆二千六百億トンの石炭が埋藏され、世界にあるいかなる有名炭田も山西省の炭田には匹敵することが出來まいと詠嘆するが如く讃辭を呈して世界の耳目を聳動せしめてからである。

この報告は後になつて外國學者の種種な調査の結果その過大評價であることを指摘され、修正されたのであるが當時にあつてはマルコ・ポーロ以來の「物語に聞く東洋の秘庫」を現實に裏書したものとして著しく列强の注意を喚起し、列國の支那への進出を拍車づけるモメントになつたと云はれてゐる。

北支・蒙疆の石炭埋藏量は、概算一千七百億トンと稱され、これを日本内地の埋藏量百六十億トンに較べると約十倍强に當る。我國の最近における石炭年消費量は七千萬トンで、假りに毎年一億トンを消費するとしても、今後一千七百年間は北支の石炭だけで賄ひ得ると云ふ勘定になる。また山西一省をもつてしても一千六百億トン。イギリスの一千四百億トンを超過すると云ふ豐富さであり、省内至る處にその埋藏が見られる。

石炭の多寡は一國の富と力のバロメーターであり、石炭のない國はその發展を抑制されると云はれてゐる今日、無盡藏に横たはる北支・蒙疆の石炭の開發は産業日本の目下の急務であると云はなくてはならない。その先決問題は、この石炭を日本内地に送るための輸血路、つまり鐵道、港灣、船舶等の運輸機構を一貫的に整備擴充することである。これが遂行されねば無盡の寶庫は永遠に開かれぬのである。北支蒙疆の水陸交通の綜合運營に當つてゐる華北交通會社はこの見地から、資材逼塞の折柄にも關らず萬難を排して新鐵道路線の建設を急いでゐるといふ。

ところで、どんな炭田がその開發の對象になつてゐるかと云ふと山西省の大同炭田(四百億トン)を始めとして河北省の開灤炭(七億トン)井陘炭(二億二千萬トン)山西省の平盂潞澤(五百億トン)山東省の甕山炭(七億三千萬トン)等が注目されてゐる。

昭和十五年七月十五日印刷納本
昭和十五年八月一日發行
八月號
(毎月一回一日發行)
編輯者 北京・華北交通株式會社資業局資料課 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替東京六四二二三番
電話九段(33)一四一五番 三三四四番
一册定價 三十錢(郵送料一錢五厘)
一ヶ年分 金三圓六十錢
廣告取扱
大阪市西區京町堀上通一丁目二五
一手取扱所 一新社
電話土佐堀九三九


NISSEN
痒い皮膚病に
ムナバールは化學的に合成したる有機硫黄化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。
【特徴】
一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。
一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。
一、品質純良にして約二六%の硫黄を含有す。
適應症
疥癬・頭癬・濕疹一切・白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰嚢頭癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性及皮膚諸疾患。
包裝
一〇瓦（瓶入）
二五瓦（〃）
一〇〇瓦（〃）
五〇〇瓦（罐入）
一〇〇〇瓦（〃）
日染
ムナバール
Munaval
ムナバール
製造元 日本染料製造株式會社
大阪市此花區春日出町
發賣元 株式會社稻畑商店
大阪市南區順慶町二丁目

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十五年七月十五日印刷納本 昭和十五年八月一日發行（毎月一回一日發行）第十四號

北支 定價三十錢